FINAL FANTASY XIII

-Corridor of Memory-

-Corridor of Memory-

I wanted to tell him everything. But not until the time was right.

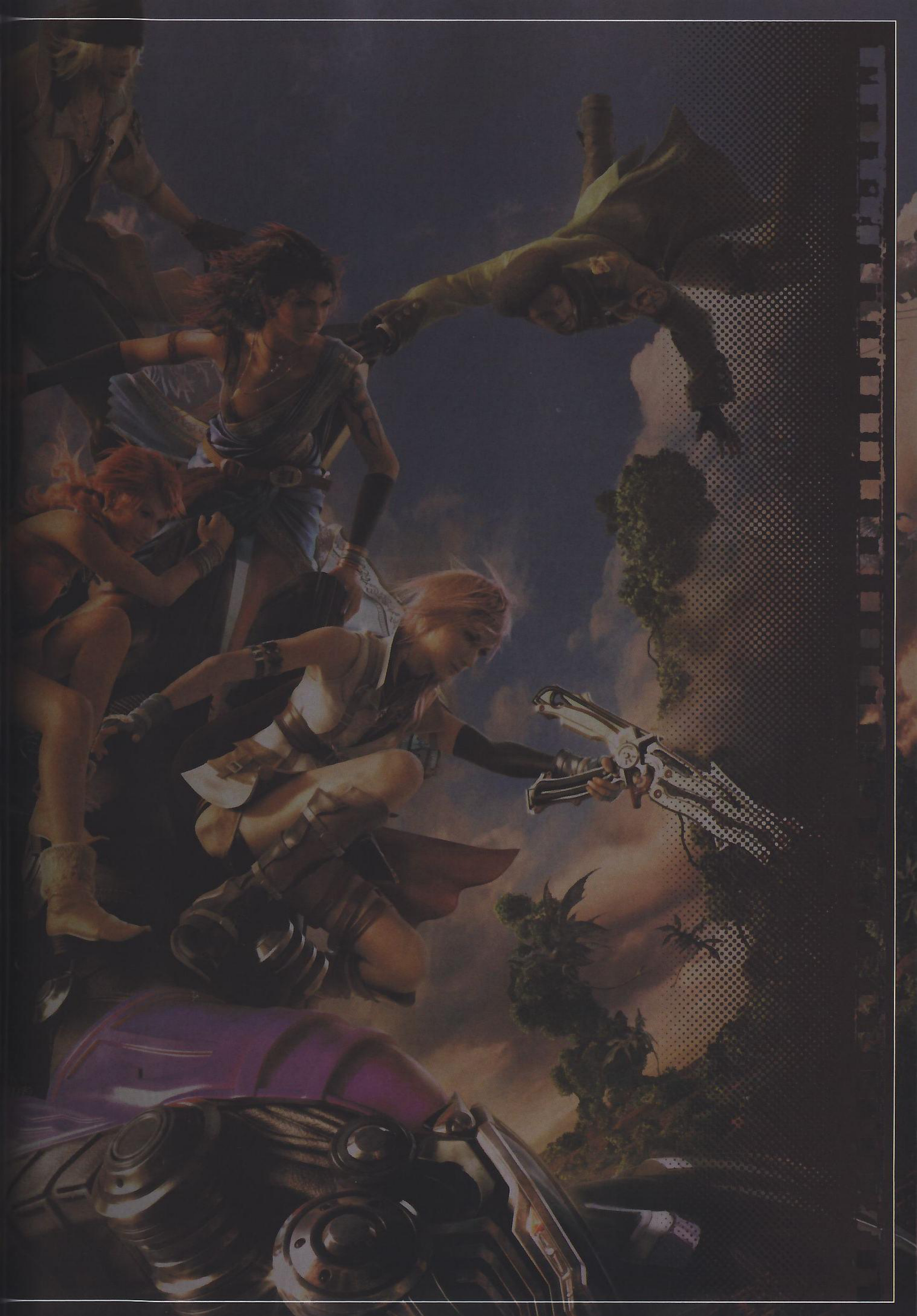
I'll do whatever it takes. I'll finish this and keep Serah safe.That's my promise.

This is it. A lot of dreams died to get us here, and we can't let it be for nothing.

When we think there's no hope left, we keep looking until we find some. Maybe Cocoon is past saving. But me? I'll cast my lot in with hers!

REMINISCENCE

「FINAL FANTASY XIII」物語のテンポや冗長性を考え、様々な選択肢の中でやむなく削った未公開シーンを紹介。
開発途中の画像ながら、その臨場感を伝えるべく制作スタッフが敢えて公開！

第2日目　ライトとスノウ初対面——臨海都市ボーダム

≫ Scene: 1

ライト、ひとりでノラ魔物を退治し終える。ほかにも数体、ちょっとした魔物がいるが、まったくひるんでいないライト。その時、突然やかましいエンジン音がとどろく。

≫ Scene: 2

音がする方へ反応するライト。改造エアバイクが2機タンデムしながら乱入してくる。エアバイクに乗る若者たち、銃を持っていて、やたらとテンションが高い。（スノウはいない）

ガドー　「ヒャッホー」

そのうちの一台に乗っているのは、ガドーとマーキー。

ガドー　「助太刀すんぜ。」

現れた若者たち、残りの魔物を、銃撃で全滅させる。ガドー、誇らしげにライトに声をかける。

ガドー　「よお兵隊さん、あぶなかったなあ。」

≫ Scene: 3

ライト　「……なんだ、おまえら。」

若者たち、悪意はまったくないのだが、なれなれしく手を振るなど、軍をナメまくってる雰囲気。

ガドー　「ノラさ。
知らねえってこたあねえだろ？」

マーキー、トリガーに手をかけたまま、手振りつきでしゃべる。

マーキー　「お礼は結構っすよ。
俺たち好きでやってるんで。」

ライト、マーキーを一喝。

ライト　「トリガーに指かけたまま、
銃をフラフラ泳がすな。」

Scene: 1

Scene: 2

Scene: 3

Scene: 4

Scene: 5

CAST

ライトニング・ガドー・マーキー・
ユージュ・レブロ

≫ Scene: 4

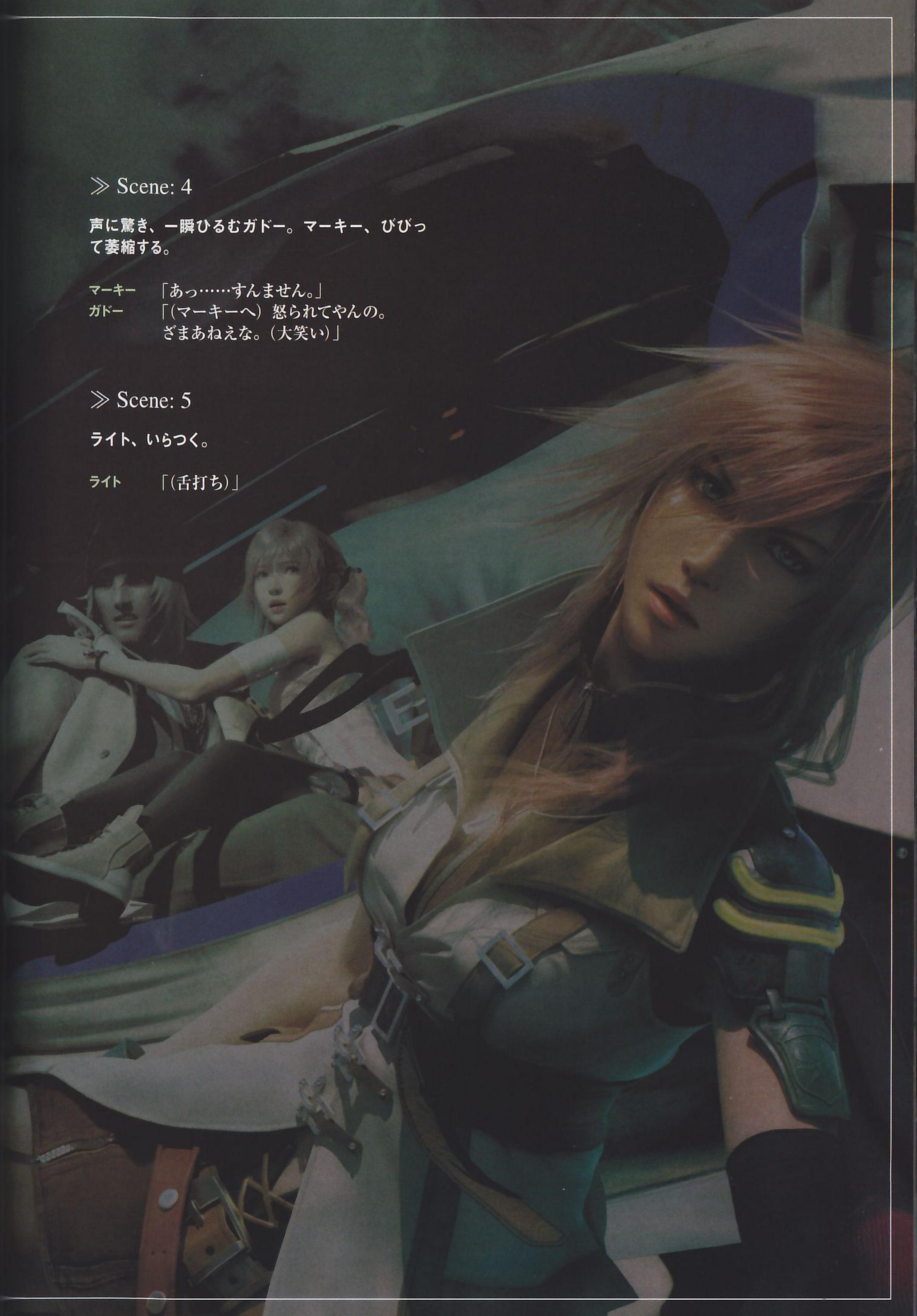
声に驚き、一瞬ひるむガドー。マーキー、びびって萎縮する。

マーキー　「あっ……すんません。」
ガドー　「(マーキーへ) 怒られてやんの。
ざまあねえな。(大笑い)」

≫ Scene: 5

ライト、いらつく。

ライト　「(舌打ち)」

第2日目　ライトとスノウ初対面――臨海都市ボーダム

≫ Scene: 1

ライト、同僚の兵士たちのもとへ歩み寄る。同僚の兵士たち2人がライトの接近に気づいて、軽く敬礼。ライト、軽く会釈しながら、アモダ曹長の下へ歩み寄る。それまでスノウたちと仲良く語らっていたアモダが振り返る。

アモダ曹長「おう隊長殿、おつかれさん。」

曹長のいつもの軽口なので、動じていないライト。

ライト　「なんの冗談です、曹長。」
アモダ曹長「うちの斬り込み隊長は、
おまえさんだろ?」

曹長、楽しそうに笑う。ライト、軽い呆れのタメ息でスルー。スノウたちに視線を送りつつ、曹長にたずねる。

ライト　「何者です。」

かわりに同僚の兵士1が答える。ライト、答えた兵士の方へ顔を向ける。

兵士1　「ノラですよ、軍曹。
聞いたことないですか?」
アモダ曹長「街の若い衆が組んだ
自警団だそうでな。
リーダーのスノウ君だ。」

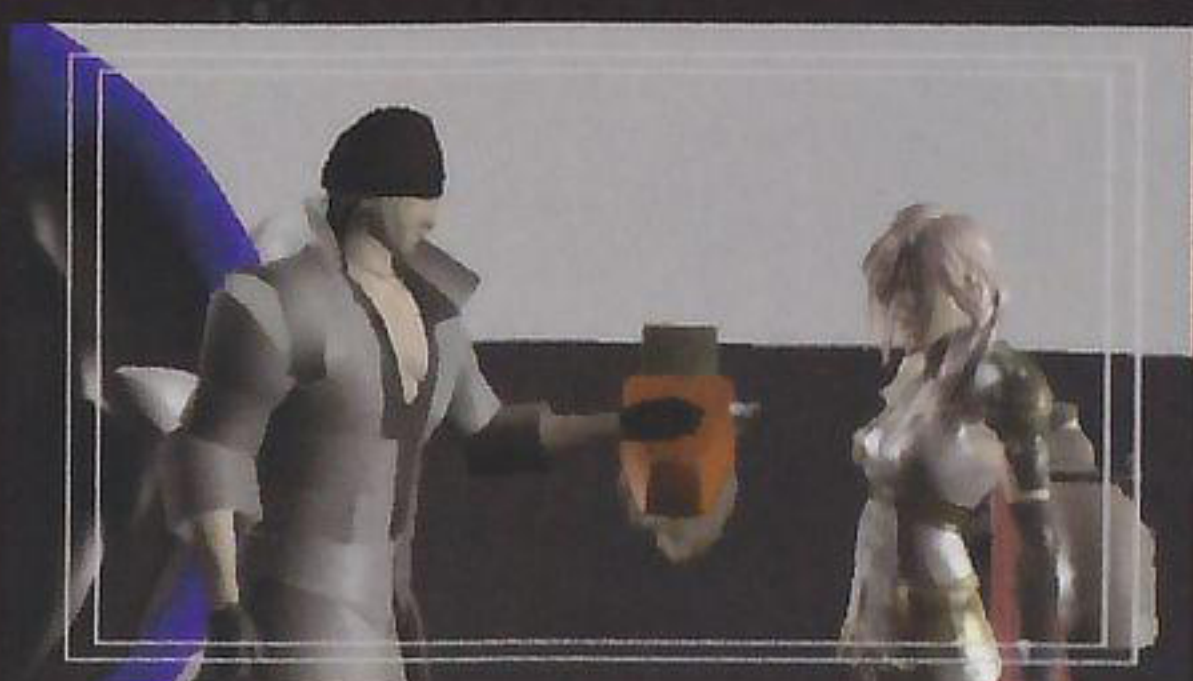
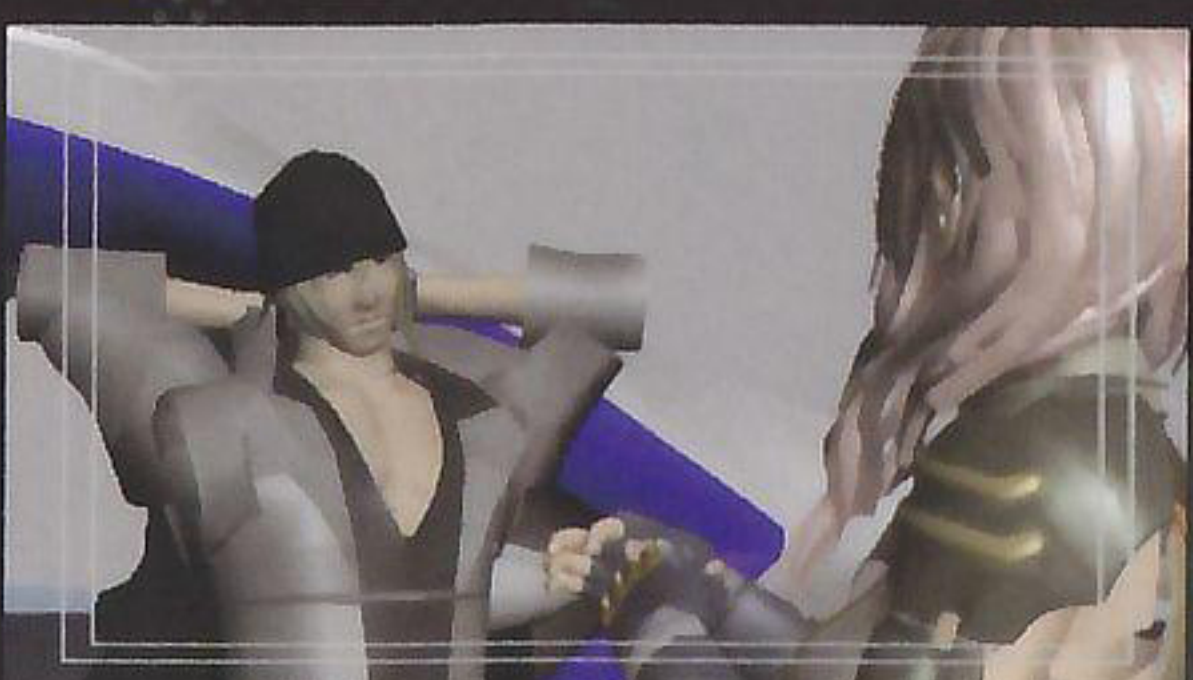
ライト、スノウという名前に、ピクリと反応（セラから名前だけ聞いていた）。冷たい視線で、見つめるライト。一方、スノウはライトを知らない。紹介されたので、ライトに挨拶をする。

≫ Scene: 2

スノウ　「ども。」

ほかのノラの面々も、ライトになれなれしく挨拶する。

マーキー　「ちぃっす。」
ガドー　「よお。」
レブロ　「よっ。」

曹長、その様子をほほえましく眺めながら

Scene: 2
Scene: 3
Scene: 4
CAST

ライトニング・アモダ・スノウ・ガドー・マーキー・ユージュ・レブロ・兵士 1,2

※ NA：ナレーション

アモダ曹長「おまえら元気がありあまっとるな。（スノウに向かって）なんなら軍に来るか？」

スノウ、曹長へ視線を向ける。そのあいだもライトはスノウを見つめている。スノウ笑いながら。

スノウ「俺ら規則とか制服とか、そういうの性に合わないんで。」

ノラの面々も、スノウに同調する。笑いながらつっこむ曹長。

アモダ曹長「なんだと、この野郎。」

すでに意気投合している様子のふたり。

スノウ「じゃあ魔物も片付いたんで、俺らはこれで。」
アモダ曹長「おう。」

エアバイクに乗り込むノラの面々。兵士1、ノラの面々に思い出したように忠告。

兵士1「おまえら調子に乗って目をつけられるなよ。うちと違ってPSICOM（サイコム）の連中は厳しいからな。」
レブロ「ノラは軍隊より強いんで。」
兵士1「生意気言いやがって。」

兵士1、兵士2に同意を求める。兵士2も、同意する。ノラたち、エアバイクのエンジンをふかす。

≫ Scene: 3

スノウも行こうとするが、ライトが呼び止める。

ライト「おまえがスノウか。」

愛想よく振り返るスノウ。

スノウ「はいはい？」
ライト「妹につきまとってるらしいな。」
スノウ「妹？」
ライト「セラ・ファロン。」

スノウ、そこでようやく把握する。

スノウ「ああ！」

スノウ、ライトのことは話しに聞いていたが、対面するのは初めてなので、底抜けにうれしそう。エアバイクから飛び降りてきて、勝手に盛り上がるスノウ。

スノウ「じゃあ、あんたがセラの姉さん？へ～！　顔は似てるけど、ほんと雰囲気違うな。姉さん軍人だってセラに聞いたから、さっき会ったときアレって思ったけど、やっぱり姉さんだったかー。」

突然あらたまる。

スノウ「初めまして！（握手を求めながら）セラには世話になってます。」

ライト、スノウが差し出すその手を無視。

ライト「セラに手を出すな。」
スノウ「……なんで？」

≫ Scene: 4

ノラの面々、ライトのただならぬ雰囲気を察知し、ライトとスノウのやりとりに注目する。

ライト「手を出すなって言ってるんだ。」
スノウ「出したら？」

ちょうど、ライトの前にヤシの実が落ちてくる。ライト、その実を踏みつけ、拳をニギニギ（「ぶん殴ってやる」の意が伝わるような動き）

ライト「手が出るな。」

スノウも理解するのだが、悪びれず、ムッとする様子もなく、ニカっと。

スノウ「ぶん殴られてもきかねえな。（聞かない＆効かない）」

ライト、カチンとくる。スノウ、ライトが踏みしめるヤシの実を蹴り上げて、キャッチしてみせる。スノウ、ニカっと笑い

スノウ「俺、頑丈なんで。」

暗転時、現在ライトの台詞。

≫ Scene 外

ライトNA（※）
「ガキを集めて大将気取って、弱いの相手に意気がって……。あのツラ見たときから気に食わなかった。」

第3日目 昼〜夕　苦悩するルシたち——下界(パルス)の異跡

≫ Scene: 1

スノウがセラと湖畔で会っている、ちょうどその頃。異跡の内部で、ファングとヴァニラが話し合っている（ファルシ部屋ではない）。

おととい（第１日目）にめざめたが、ファングは自分の使命がわからないし、記憶も混乱しているので苛立っている。

≫ Scene: 2

ファング　「使命、視えたか？」

無言で首を振るヴァニラ。彼女は記憶を失っていないが、隠している。

≫ Scene: 3

ファング、ため息をついて。

ファング　「どーなってんだ？　ったく。
目が醒めたのに使命はわかんねーし、
ふたりとも記憶がとんでるしよ。」

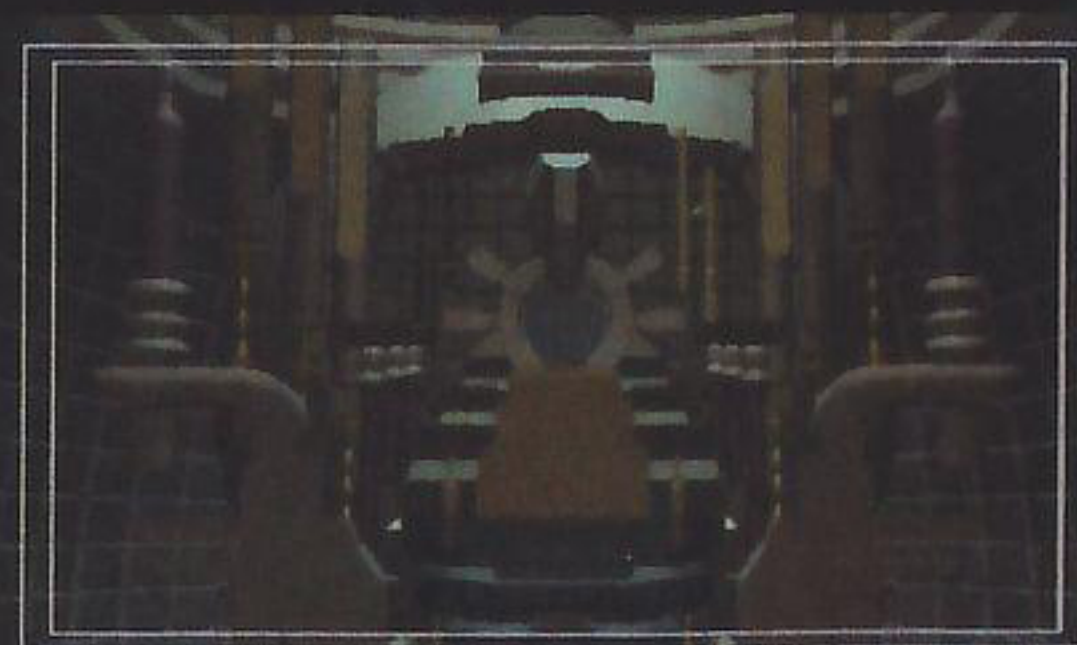
ファング、焼け焦げ状の烙印(しるし)を見つめる。

≫ Scene: 4

ヴァニラ　「もういいんだよ、使命なんて。」
ファング　「よくねーって。」

ファング、ヴァニラの衣服をまくって、しるしを露出させる（それが可能な構造の衣服なら）

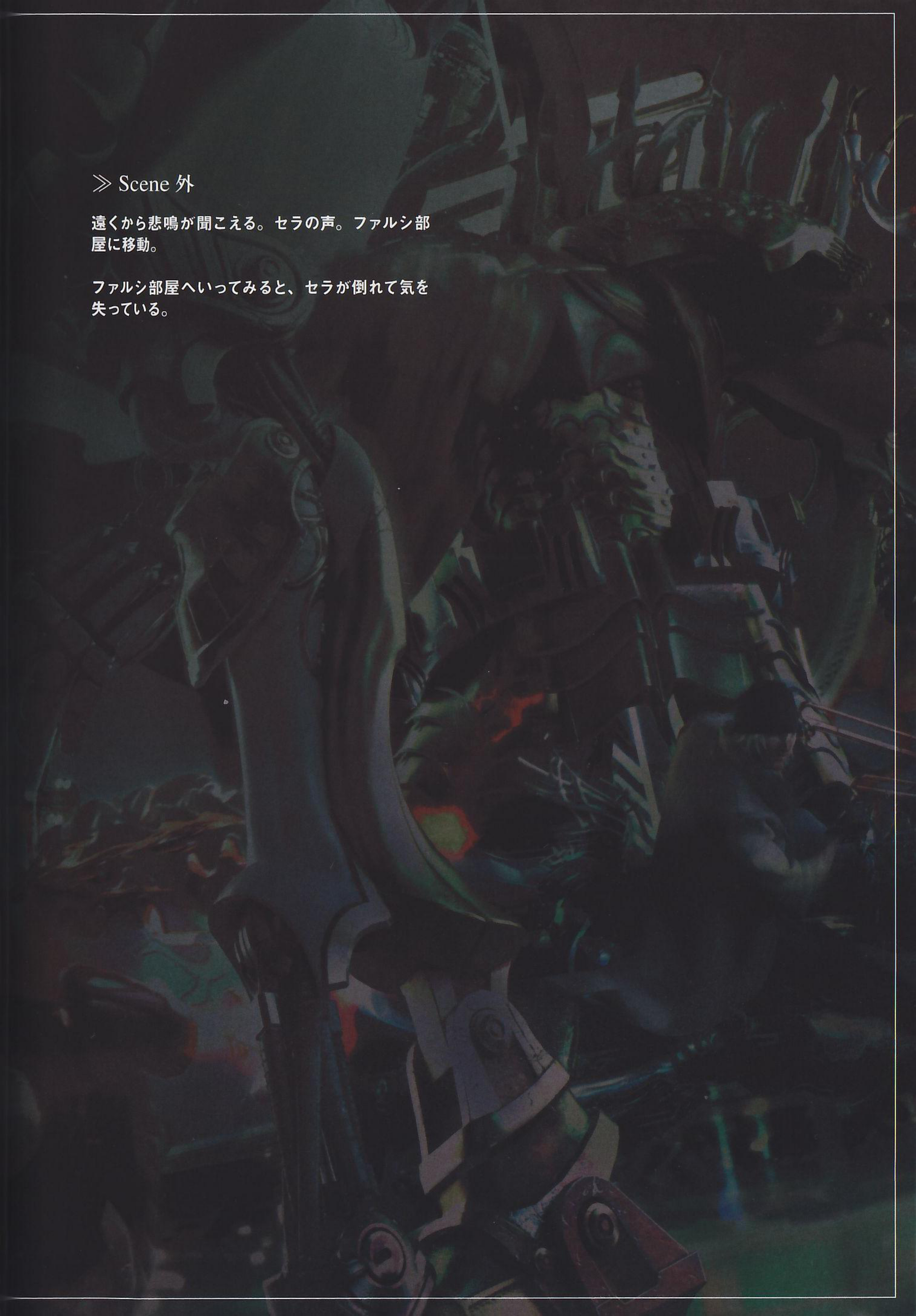
≫ Scene: 5

ファング　「おまえのしるしは生きてるんだ。
使命突き止めて片付けねーと、
シ骸(しがい)になっちまうだろーが。」
ヴァニラ　「でも、私たち何も思い出せないし——」

Scene: 1
Scene: 2
Scene: 3
Scene: 4
Scene: 5
CAST

ファング・ヴァニラ

≫ Scene 外

遠くから悲鳴が聞こえる。セラの声。ファルシ部屋に移動。

ファルシ部屋へいってみると、セラが倒れて気を失っている。

第3日目 昼～夕　苦悩するルシたち――下界の異跡

≫ Scene 外

ファング武器をかまえたまま油断なく接近。

ヴァニラ　「コクーンの人？」
ファング　「らしーな。」

ファングちらちらと周囲をうかがって、

ファング　「……こいつだけか。
ひとりで迷い込んだな。」

≫ Scene: 1

ファング冷ややかな目でセラを見下ろす。口封じのため始末したほうがいいかと考えている（まだ行動はしない）一方セラを観察していたヴァニラ、あることに気づく。

ヴァニラ　「待って！」

セラの傍らに跪いて示す。

≫ Scene: 2

ヴァニラ　「見て……ルシにされてる。」
ファング　「なんだと！？」

≫ Scene: 3

セラの体に烙印が現れている。下界の烙印。

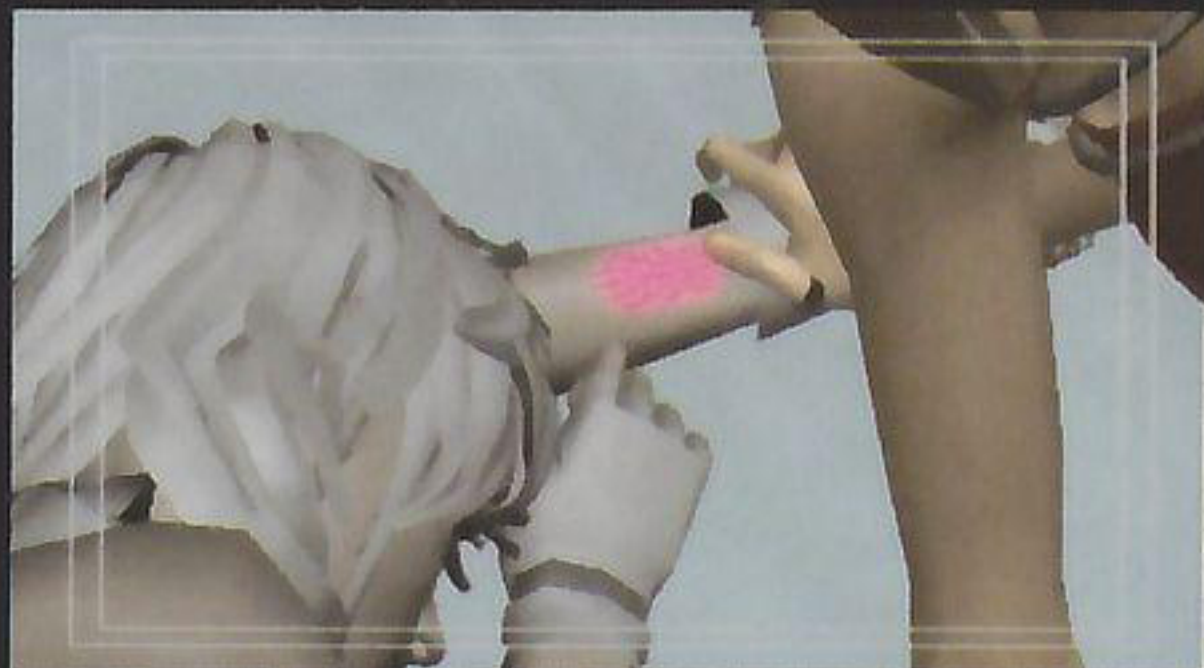
ファング　「なんで……。」

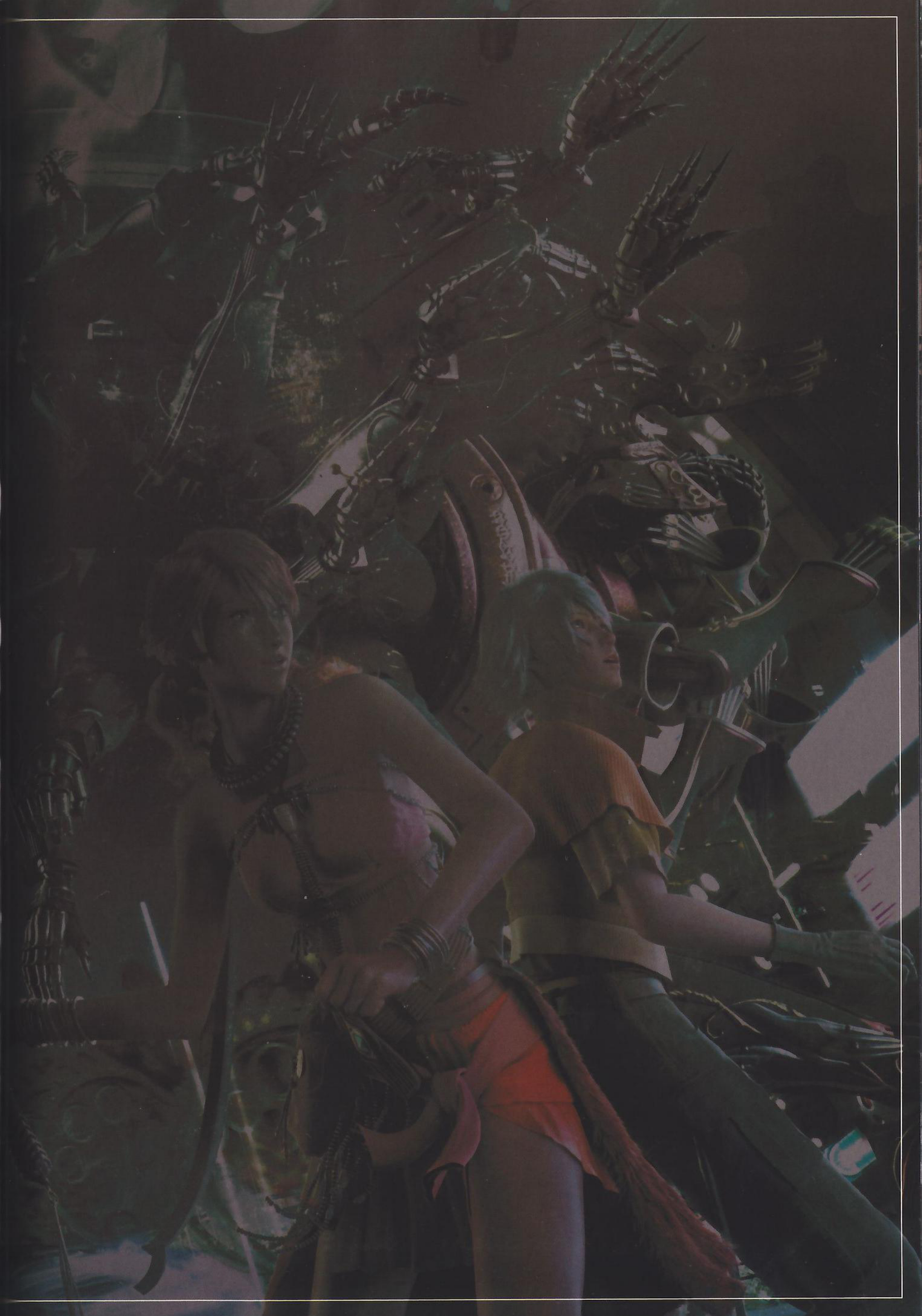
≫ Scene: 4

ファルシを見つめ、茫然自失気味に。

ファング　「なんでコクーンの奴を選ぶんだ……。」

ファルシの答えはない。

場面転換。

Scene: 1
Scene: 2
Scene: 3
Scene: 4
CAST

ファング・ヴァニラ・セラ

第4日目　使命をつきとめたい――ボーダムの街中

≫ Scene 外

ファングとヴァニラの回想。この前日セラがルシにされて「早く使命を突き止めなければ」と焦っている時点。場所はボーダムのどこか。

グラン＝パルスしか知らないふたりが、街中を散策してコクーンの平和な生活を見て戸惑う、等。エウリーデの事故が起こるのはこの翌日なので、人々は（軍や聖府も含めて）ルシにおびえることなく平和を謳歌している。

≫ Scene: 1

ボーダムの街中、スノウ＆セラがライトニングへのプレゼントを買う（10日目）場所あたり。ヴァニラが座っていると、飲み物をふたつ持ったファングが帰ってくる。

ファング　「妙な場所だな、
　　　　　コクーンっつうのはよ。」

≫ Scene: 2

ヴァニラに飲み物を放ったのち、市民用のIDカードを見せて

ファング　「こんなもんで何でも手に入るなんてよ。」
ヴァニラ　「それ（カード）、どうしたの？」
ファング　「スった。」

ちなみにスッたカードを使っても足がつかないのはレインズの介入。

≫ Scene: 3

悪びれずに笑い、ファングはヴァニラの隣に腰を降ろす。声の調子が低くシリアスになる。

ファング　「武器まで売ってる。戦えるぞ。」
ヴァニラ　「こんなに平和なんだから、
　　　　　戦う必要なんか――」
ファング　「うちらがルシに選ばれたのは、
　　　　　コクーンと戦うためだろ。」

わかりきったことのように断定してから、ニヤリと

Scene: 1

Scene: 2

Scene: 3

Scene: 4

Scene: 5

CAST

ファング・ヴァニラ

フォロー。

ファング　「今度の使命はわかんねーけどな。
たしかにここはバカみたいに平和だし、
戦わなくていいのかな。」
ヴァニラ　「……そうだよ、きっと。」

≫ Scene: 4

ファング　「とにかく使命がはっきりしねーと、
話が始まらねーよ。
相手のツラを拝みに行こう。」
ヴァニラ　「相手って？」

≫ Scene: 5

ファング　「エウリーデ峡谷って場所に、
コクーンのファルシがいるらしい。
そいつに会えば、使命が視えてくるとか、
うちらの記憶が戻るとか……
まあ、何か起こるさ。
明日行くからな。」

ヴァニラは隠している。自分の使命が「コクーンと戦う」であると知っているが、実行したくないので隠している。

第5日目　施設の異変——エウリーデ渓谷　施設入口

≫ Scene: 1

静かな館内。受付のお姉さんと話す親子。会話しているカップルなど。

≫ Scene: 2

サッズ、施設の入口を見やって独語。

サッズ　「入っちまったのか?」

その呟きが引き金となったかのように、施設に異変が起こる。電源が不安定になったのか、明かりがフッフッと不安定に明滅。

サッズ　「(怪訝アドリブ)」

≫ Scene: 3

ズシンと鳴動。施設から天をめがけて蒸気が勢いよく噴出。

≫ Scene: 4

ようやくサイレンが鳴り始めたかと思うと、ズシンズシンと断続的な鳴動とともに施設のあちこちから煙が噴出。

≫ Scene: 5

ヴァニラとファングの侵入で、ファルシが活性化して起きたトラブル。観光客が悲鳴をあげて逃げ出してくる。

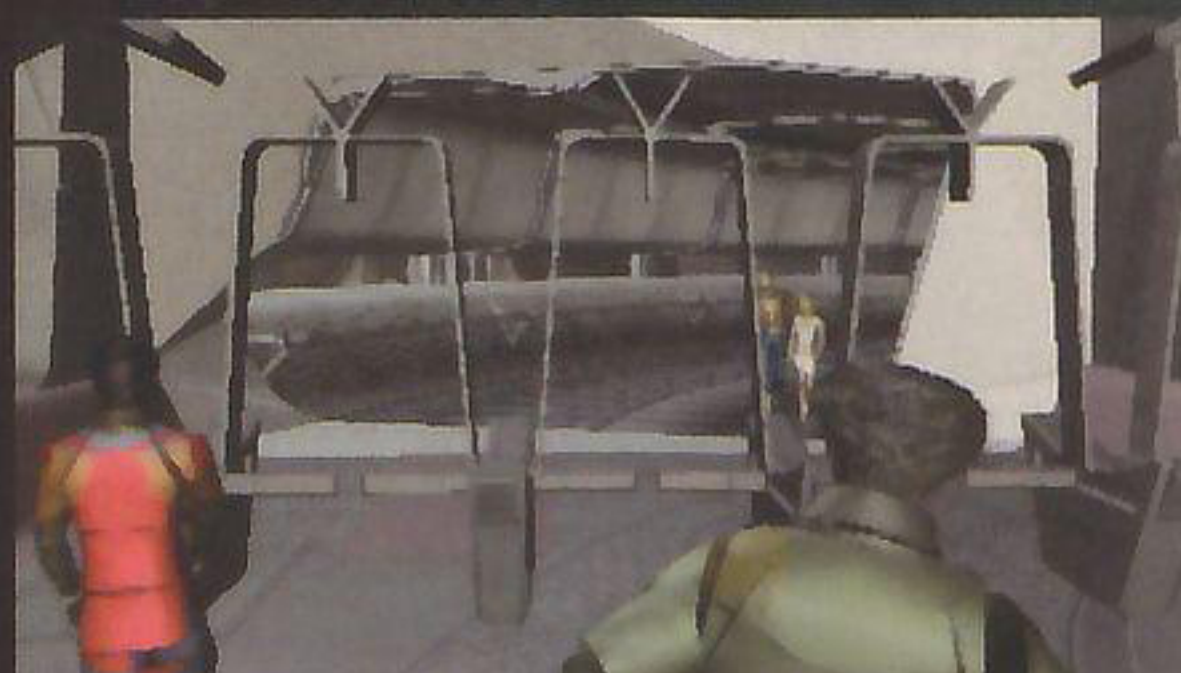
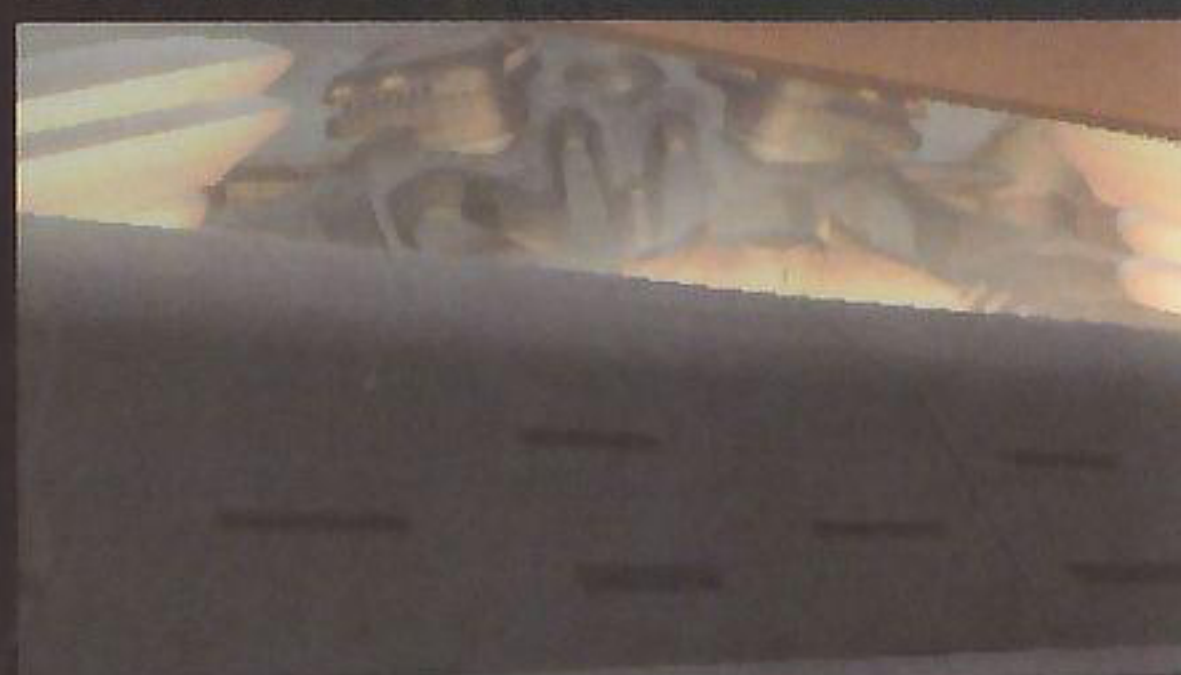
≫ Scene: 6

サッズ　「ドッジ!?」

鳴り響くサイレンと地響きの中、サッズはドッジを探しに施設へ飛び込む。施設から逃げてくる人たちをかきわけるように進む。

◆FREE移動（サッズ）

Scene: 1

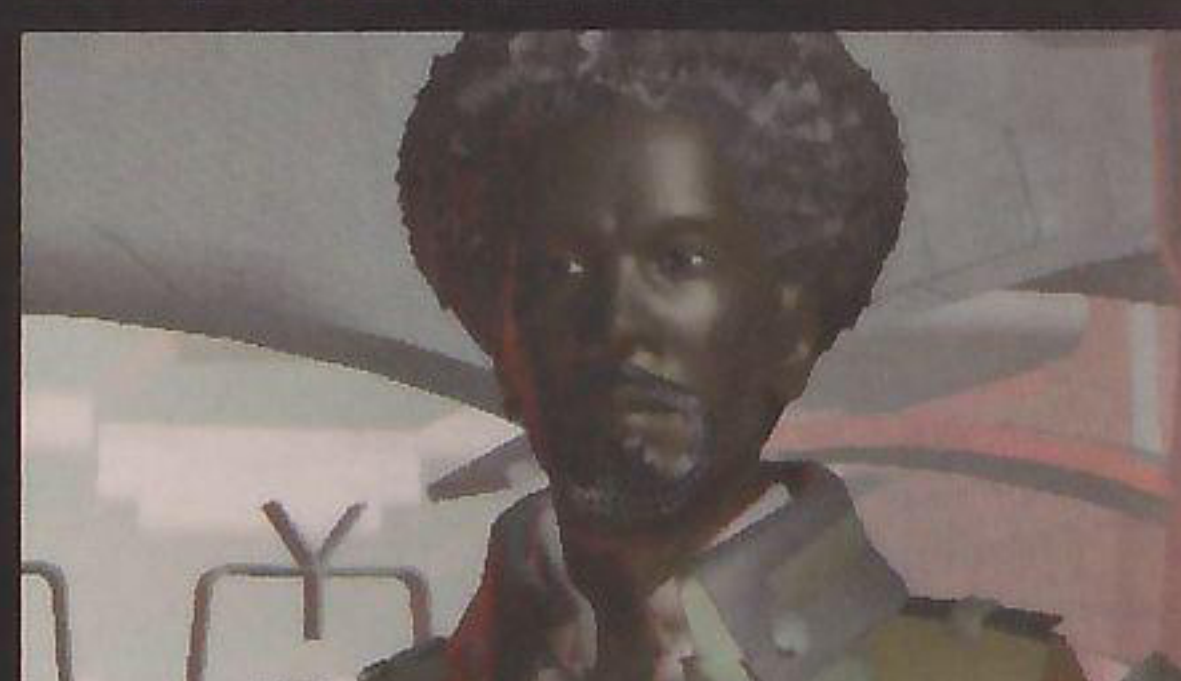
Scene: 2

Scene: 3

Scene: 4

Scene: 5

Scene: 6

CAST

サッズ

第6日目　ヴァニラ捜索中の拘束――ボーダム

≫ Scene 外

施設の裏口あたりから出た場所。ファング、軍の追跡から逃げながら、ヴァニラを探している。全速力で走りながら、ひとりごちるファング。

ファング　「ヴァニラ、どこだっつーの……。」

どうにか振り切った―一瞬だけ安堵するが、そのスキを突かれる。身を潜めていた兵士が、後ろから彼女に組み付く。

≫ Scene: 1

他にも数名が現われてファングを取り囲み、銃をつきつける。施設の警備兵やPSICOM(サイコム)ではなくレインズの騎兵隊なのだが、ファングにはもちろんわからない。

ファング　「てめえっ――」

抵抗しようとするが、組み付いた兵士（リグディ）が低く叫ぶ。

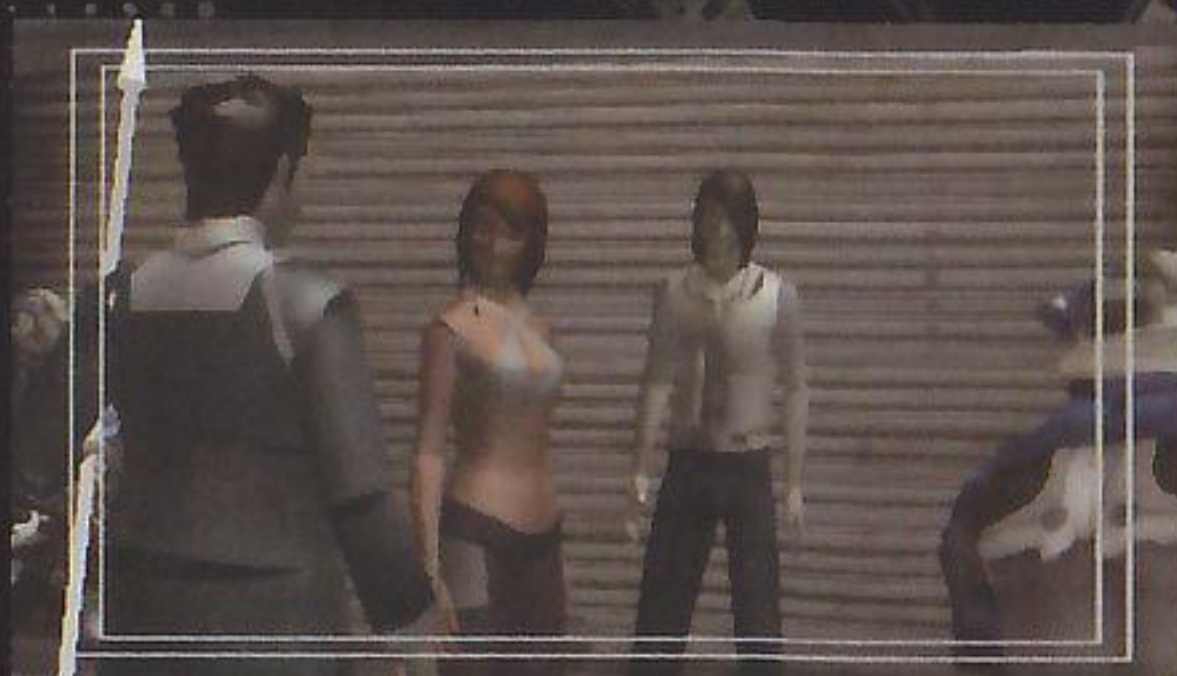
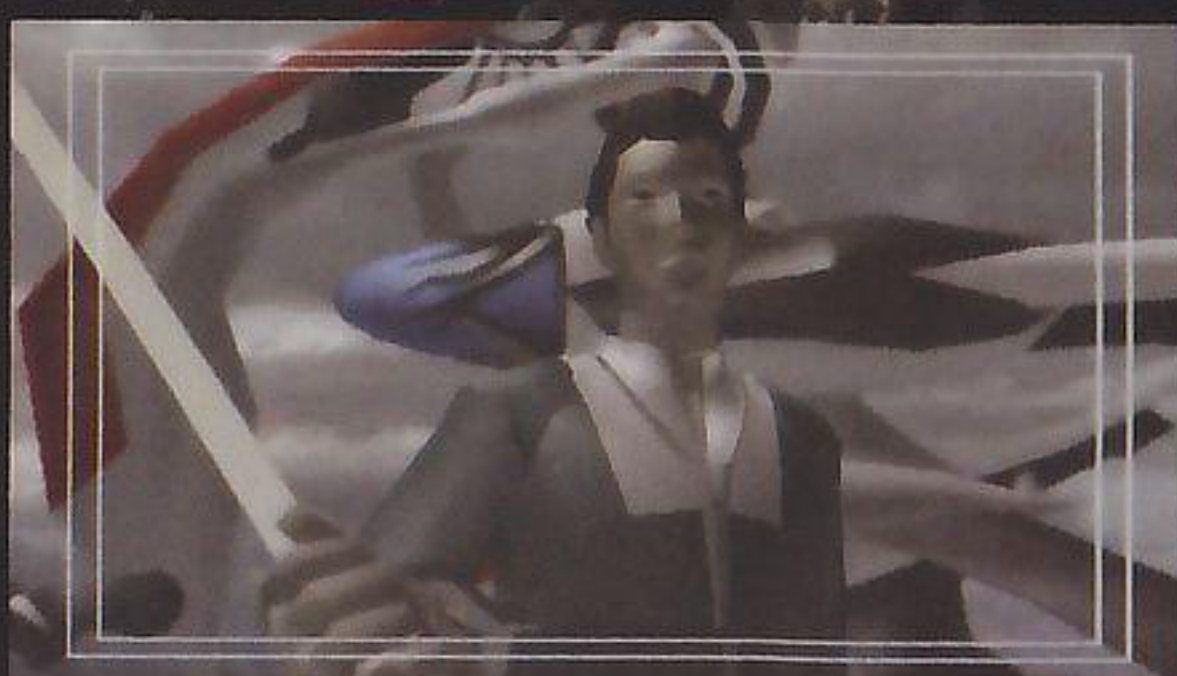
リグディ　「騒ぎなさんな。敵じゃない。」

ファング、相手の意図が理解できないが、銃口の圧力もあり、無言のまま動きをとめる。かたわらでレインズが悠然と無線で話している。ファング、兵士たちのリーダーらしきレインズの様子を窺う。

≫ Scene: 2

レインズ　「ナバート中佐、状況は？」

通信相手はナバート。通信の会話は、ファングには聞こえない。（階級はレインズのほうが上の准将なので、彼女は表面的には丁寧）

無線ナバート
「容疑者は依然逃亡中です。
峡谷一帯に非常線を張り、
われわれPSICOMと警備軍各部隊が
協同で捜索にあたります。
閣下の広域即応旅団も、
ただちに捜索に加わってください。
容疑者を確保した場合、

Scene: 1
Scene: 2
Scene: 3
Scene: 4
Scene: 5
CAST

ファング・リグディ・
レインズ・ナバート（声）・兵士数名

身柄はすみやかに PSICOM へ——。」

レインズ、ファングに視線をやりつつ。

レインズ　「引渡せ、とのご命令かな?」
ナバート　「要請です。」

≫ Scene: 3

レインズ　「PSICOM の“要請”は
聖府首脳の命令も同然だろ。
あなたほど優秀な管理官が動くとは、
よほどの大事のようだ。」
ナバート　「申し訳ありませんが、
お答えいたしかねます。
聖府防衛機密に属する
PSICOM 管轄事項です。」
レインズ　「ふっ。予想通りのお答えだ。」

無線連絡を終えてから、レインズはファングに向き直り、いきなり切り出す。

レインズ　「君はこう考えている。
『下界(パルス)のルシにとって、
コクーンの人間はすべて敵』」

≫ Scene: 4

ファングは答えない。「なんだコイツ」という顔でレインズをにらみ返す。それに構わず、レインズは手をさしのべる。

レインズ　「何事にも例外はある。
われわれはコクーンを守るべき軍人だが、
ルシの敵ではない。
むしろ力を借りたいのだ。
——聖府と戦う力をね。」

≫ Scene: 5

回想〜現在の暗転中に、現在のファングによる語りが入る。

ファングNA「そうして騎兵隊に拾われて、
ずっとヴァニラを捜してるけど、
見つからねーんだ……
ヴァニラも使命も。」

第10日目　プレゼントさがし――ボーダム商店街

≫ Scene: 1

ボーダムの商店街、花火大会の前日。セラと連れ立って歩いていたスノウは、ふと気づく。

スノウ　「あれ？」

セラが身に着けているアクセサリが変化している。これまで（3日目＆7日目の回想）身に着けていたアクセサリとは異なり、見慣れない意匠の品。

グラン＝パルス風の品。セラはこの前日にヴァニラと会い、アクセサリを交換している。

スノウ　「どうしたんだ、それ？」

≫ Scene: 2

セラ　「交換したの。」
スノウ　「男！？」
セラ　「女の子だよ。」

セラは笑って答え、スノウも深くは追求しない。

スノウ　「ふーん……。
ライトニングのプレゼントも、
そういうのがいいのかな。」

≫ Scene: 3

セラ　「どうかなあ。お姉ちゃん、
こういうものに興味ないから。」

≫ Scene: 4

スノウ　「せっかくふたりで選ぶんだから、
身に着けるものがいいよな。
ま、探そうや。」

明後日はライトの誕生日なので、スノウとセラはプレゼントを探しているのだった。セラはそのときライトにルシの件を告白するつもり。スノウは明晩（花火大会）でセラにプロポーズしようと考えている。

Scene: 1

Scene: 2

Scene: 3

Scene: 4

CAST

スノウ・セラ

≫ Scene 外

◆ＦＲＥＥ移動（スノウ+セラ）

街中では、第５日のプラント事故が話題になっていたりする。事件による影響（エネルギー不足とか？）が微妙に出ていたり。エウリーデ峡谷周辺は全面閉鎖とか。

FREEでプレゼントを探すあいだ、適宜ちょっとした会話を想定

第10日目　プレゼントさがし——ボーダム商店街

≫ Scene: 1

スノウ、店先のショーウィンドウにふと目を留める。ペアの婚約アクセサリ（翌日の花火大会回想でセラに渡すもの）

スノウ　「先行っててくれ。」
セラ　「なに？」

≫ Scene: 2

スノウ　「トイレ。」
セラ　「もお。」

≫ Scene: 3

セラ、苦笑して離れていく。スノウ、セラが離れるのを確認してから店に入っていく。

F/I：フェイド・イン→ F/O：フェイド・アウト

≫ Scene: 4

スノウ、店から出てくる。購入した婚約アクセサリを見つめていたが、懐に隠す。

セラ　「スノウ！」

≫ Scene: 5

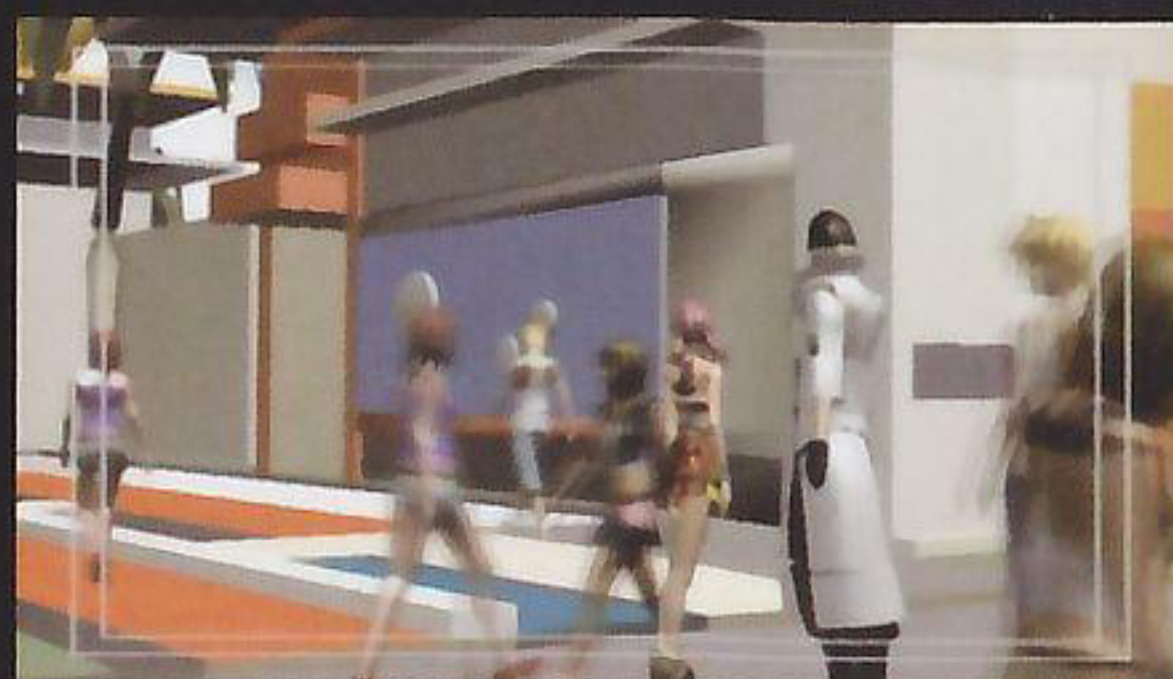
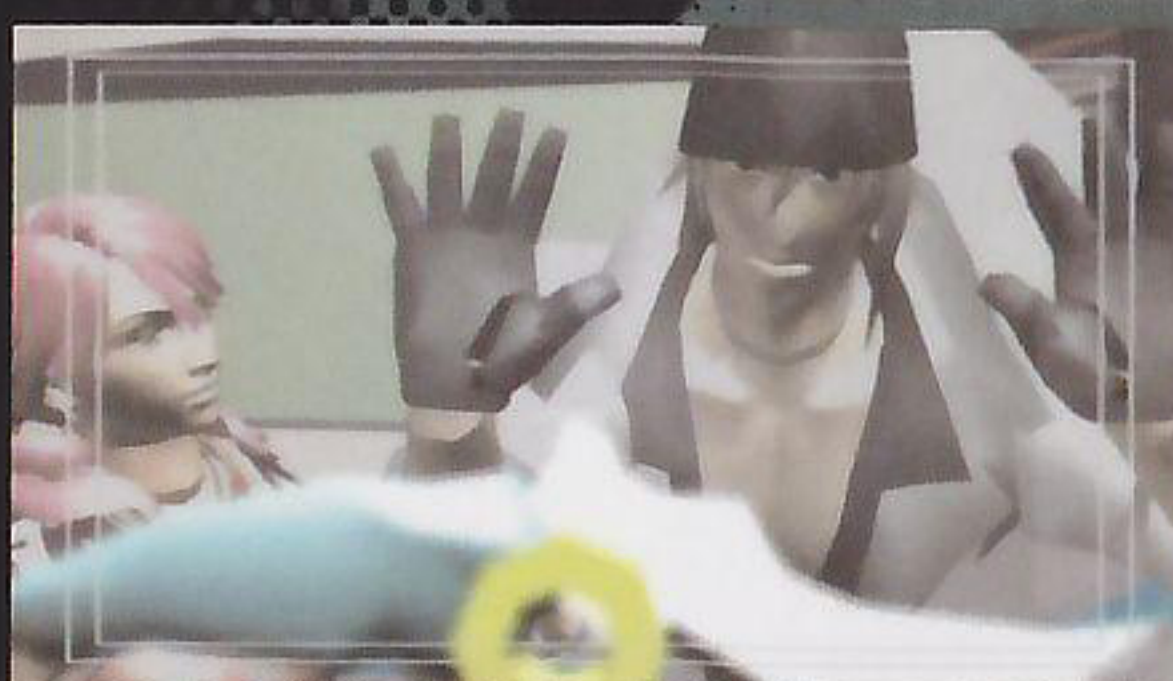
遠くから呼びかけられる。あわててアクセサリを隠しつつ振り返ると、セラが小走りに戻ってくる。

セラ　「プレゼント、見つけたよ。」

セラの後につづいて店へ（JUMPでもFREEでも）セラが選んだ品を眺めて。

≫ Scene: 6

スノウ　「これ？」

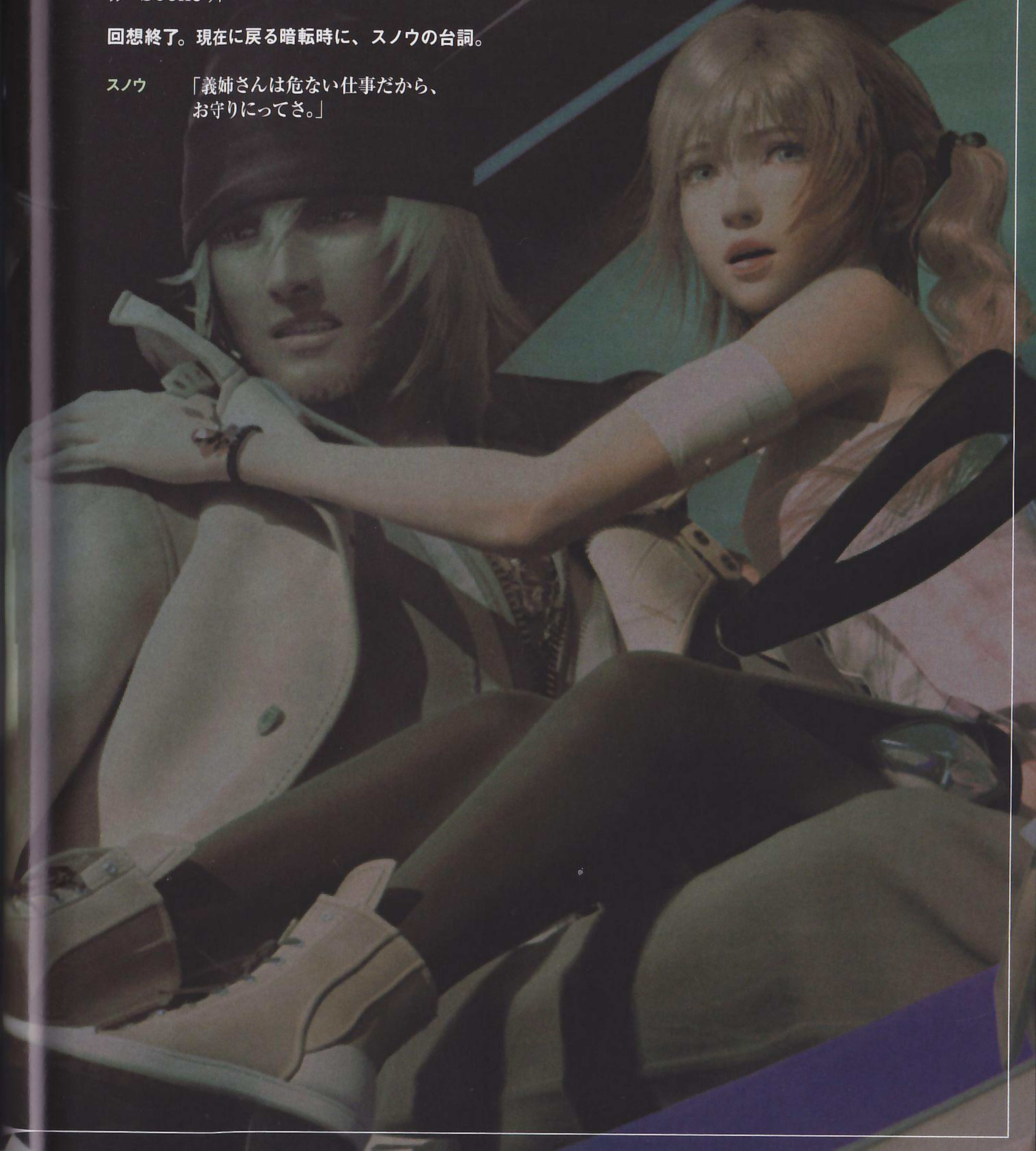
例のサバイバルナイフだ。

Scene: 1
Scene: 2
Scene: 3
Scene: 4
Scene: 5
Scene: 6
CAST

スノウ・セラ

スノウ　「誕生日のプレゼントにしては、
なんていうか――。」

≫ Scene 外

回想終了。現在に戻る暗転時に、スノウの台詞。

スノウ　「義姉さんは危ない仕事だから、
お守りにってさ。」

第12日目　ロッシュの街頭説明——臨海都市ボーダム

≫ Scene 外

ボーダム市街。軍の戦闘機やエアバイクがあわただしく空を行きかう。ボーダム封鎖の情報を聞いて、情報を求める人で人だかりができている。

≫ Scene: 1

ルシのことを打ち明け、家を飛び出したセラを必死で探しているライト。ライト、上空を行きかうエアバイクを見上げる。

ライト　「くそっ、ごめんで済むか！」

≫ Scene: 2

ライトの目の前に、軍の車両がのりつける。ライト、ひとだかりに歩み寄る。PSICOM のロッシュ中佐が市民を説得している。市民のパニックを抑えるために高圧的な態度は控える。事務的な対応。

≫ Scene: 3

市民A（ガヤ※）　「下界（パルス）のファルシを壊せばいいだろ！」

ロッシュ　「無論その予定ですが、ファルシの排除だけでは問題は解決しません。さまざまな対策が必要です。」

市民B（女）（ガヤ）「対策って何を！」

≫ Scene: 4

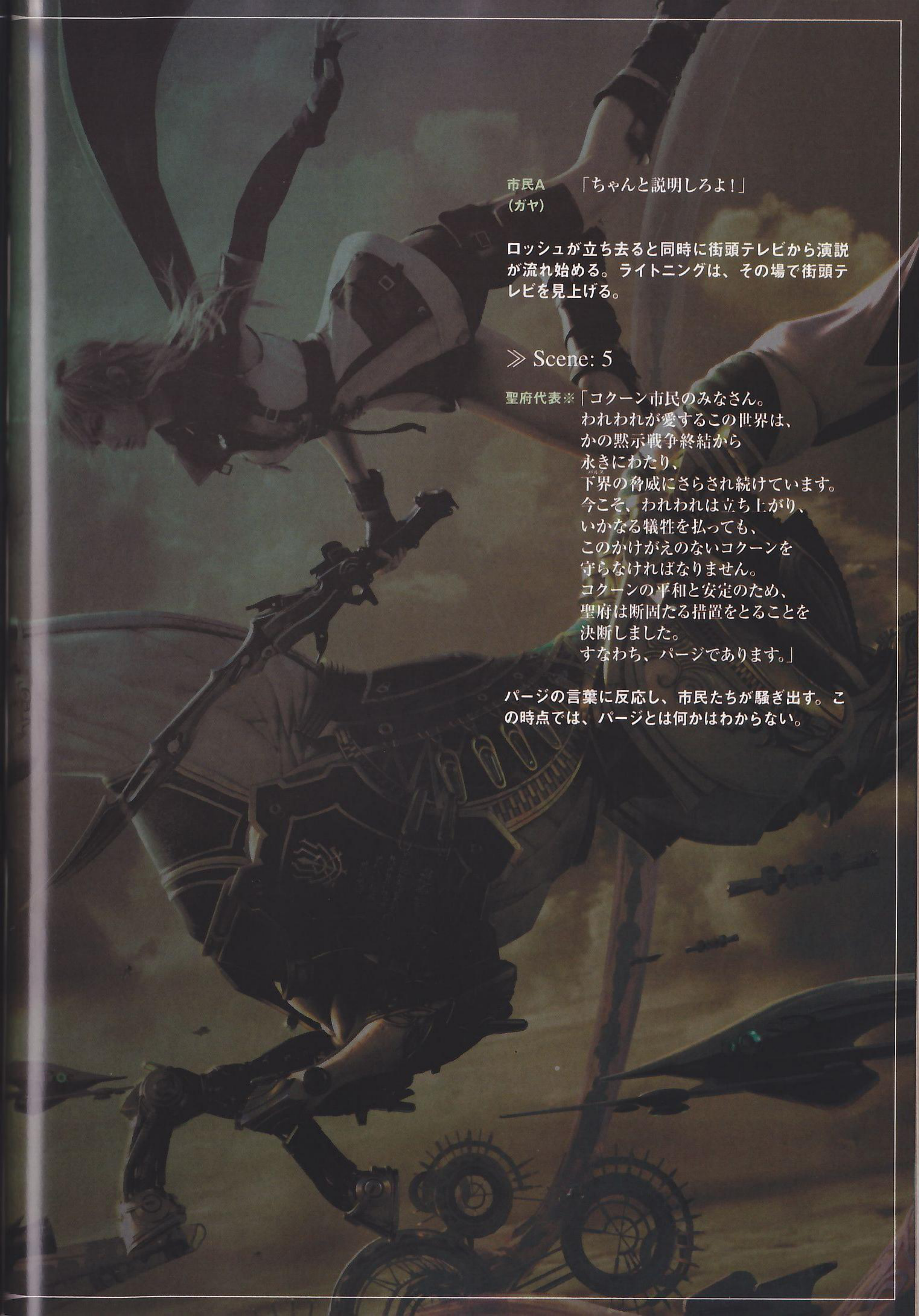
ロッシュ　「まもなく聖府の発表があります。コクーンを守るために必要な措置です。みなさんにも、ぜひ協力していただきたい。」

ライトが近づくと、部下がロッシュに耳打ち。ロッシュ、市民に会釈してその場を去る。

市民C（ガヤ）　「駅の封鎖はいつ解けるんだ。さっさと帰りたいんだよ！」

Scene: 1

Scene: 2

Scene: 3

Scene: 4

Scene: 5

CAST

ライトニング・ロッシュ・市民数名・PSICOM 兵数名・ダイスリー

※ガヤ：その他大勢の人たちのヴォイス
※聖府代表：ダイスリー

市民A（ガヤ）　「ちゃんと説明しろよ！」

ロッシュが立ち去ると同時に街頭テレビから演説が流れ始める。ライトニングは、その場で街頭テレビを見上げる。

≫ Scene: 5

聖府代表※「コクーン市民のみなさん。
われわれが愛するこの世界は、
かの黙示戦争終結から
永きにわたり、
下界(パルス)の脅威にさらされ続けています。
今こそ、われわれは立ち上がり、
いかなる犠牲を払っても、
このかけがえのないコクーンを
守らなければなりません。
コクーンの平和と安定のため、
聖府は断固たる措置をとることを
決断しました。
すなわち、パージであります。」

パージの言葉に反応し、市民たちが騒ぎ出す。この時点では、パージとは何かはわからない。

第12日目　烙印の痛み——臨海都市ボーダム

≫ Scene: 1

ふたりのそばに、軍用エアバイクが乗り付けられる。

アモダ曹長「ここは立ち入り禁止だぞ。」

ライトの回想に登場した曹長さん。注意してから、スノウの顔を思い出す。

アモダ曹長「おっ？
おお、スノウ君か。何しとるんだね。」

よっこらせとエアバイクから降りてくる。

スノウ「何があったんです。」
アモダ曹長「ん？　それは、あれだ……(ごまかす)
ともかく、
おまえらノラの出る幕じゃない。」

≫ Scene: 2

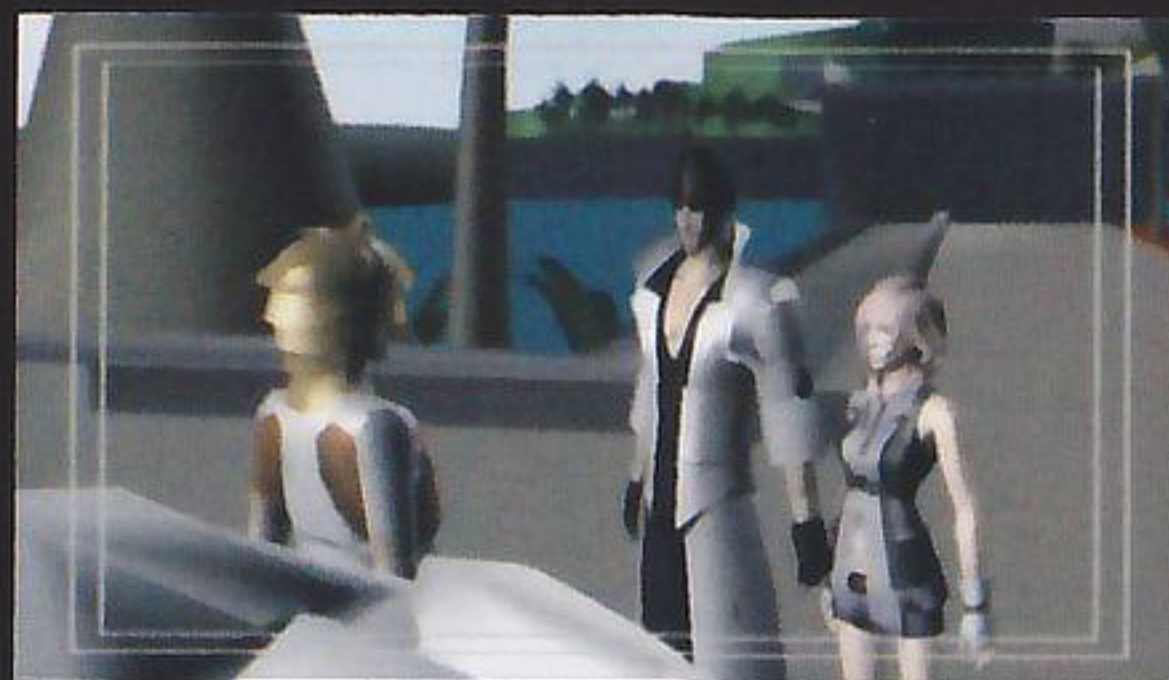
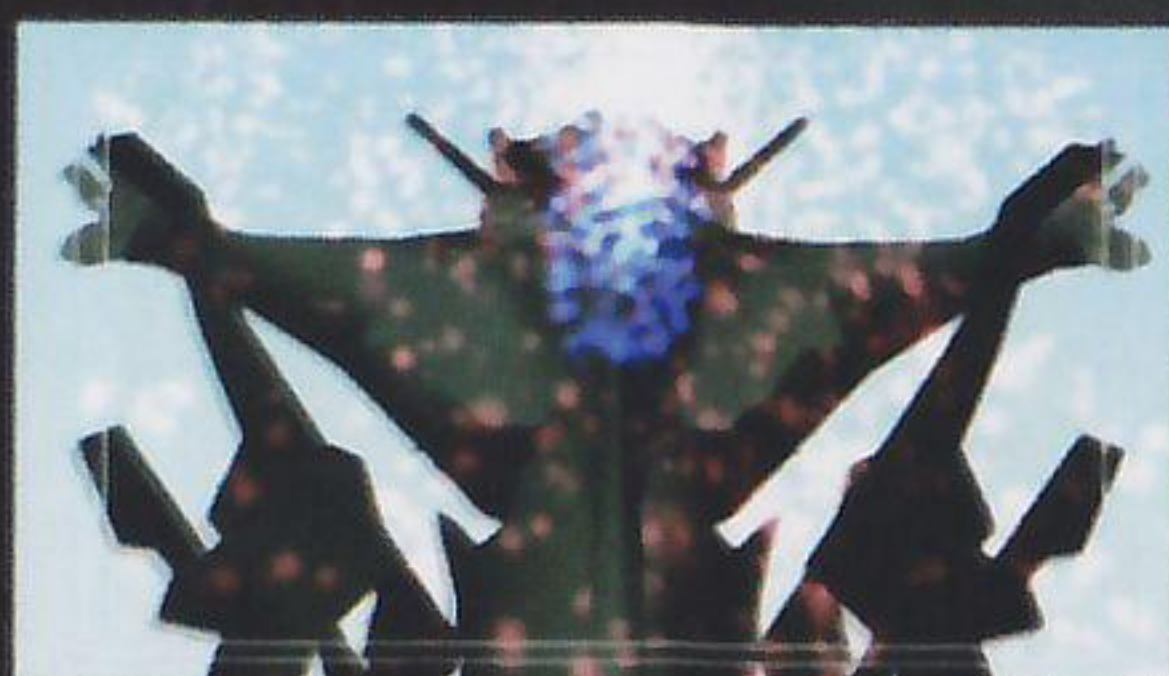
セラ「ファルシですか。」

曹長「なんでそれを」とギョっとしてから、納得。

アモダ曹長「ああ、もう発表の時間か……。
そうだ、下界(パルス)のファルシだ。
あの異跡、下界(パルス)のゴミだと思っとったが、
中でファルシが寝てやがるとはな。」

≫ Scene: 3

ファルシを振り返り、薄気味悪そうに。

アモダ曹長「ここだけの話、
調査に入ったPSICOMの連中が、
何人か閉じ込められとるらしい。
まったく、
迷惑なもんが眠ってたもんだ。」
スノウ「どうするんだ？　壊すのか！？」
アモダ曹長「それがなあ、
一切合財PSICOMが仕切っとって、
うちの連隊には、
ちっとも情報が降りてこんのよ。
どうもどこぞに運ぶらしいが——」

Scene: 1
Scene: 2
Scene: 3
Scene: 4
Scene: 5
Scene: 6
CAST

アモダ・スノウ・セラ

≫ Scene: 4

曹長のぼやきを断ち切るように、鳴動が来る。震源地はファルシだ。

しもべのルシを呼んでいるという理屈。

≫ Scene: 5

突然の出来事であっけにとられる曹長。一方セラは別の反応。鋭い痛みを感じたかのようによろめき、包帯の上から烙印を抑える。スノウ、それに気づいて。

スノウ　「セラ！？」
セラ　「わかんない……呼んでる？」
スノウ　「ファルシか！？」

≫ Scene: 6

スノウ、セラの答えを確かめる時間も惜しく、まだ驚いている曹長さんに歩み寄って

スノウ　「ごめん！」

パンチ一発。彼のエアバイクを奪い、セラを抱きかかえて（？）発進。

スノウ　「行くぞ！」

FINAL FANTASY. XIII

FINAL FANTASY XIII Corridor of Memory / -Episode i-

制作・編集　是枝良昌／青島岳志
［SQUARE ENIX 書籍チーム］

制作協力・監修　鳥山 求／渡辺大祐
［SQUARE ENIX 開発チーム］
大藤昭夫／村上洋平
［SQUARE ENIX 宣伝チーム］
SQUARE ENIX
開発チーム／宣伝チーム

トータルデザイン　鈴木雅人
［株式会社フライングベル・カンパニー］

小説執筆　映島 巡

本書に関するサポート情報はこちらまで
スクウェア・エニックス サポートセンター http://support.jp.square-enix.com/
※上記サイトでは、各種検索機能を利用して、製品やサービスのサポート情報を確認できます。
ご意見やご要望などもスクウェア・エニックス サポートセンターをご利用下さい。

Printed in Japan　NOT FOR SALE

暗い海が広がっていた。

正確には、海のようなもの。寄せて返す波はひたすらに黒々として、海鳴りもなく、潮の香りもない。まるで、夜の底で深い闇が蠢（うごめ）いているかのように見える。少なくともこれは自分の知る海ではない。

海だけではない。この場所そのものが、自分の知るどんな場所とも違っていた。魔物らしきものはいるようだが、動植物は見かけなかった。生命の気配というものがまるで感じられないのだ。

音もなく、色もない。それが単に静けさと暗さによるものなのか、自分自身の五感に狂いが生じたせいなのかはわからなかった。

五感だけではなく、時間の感覚もひどく曖昧だった。気が遠くなるほど長い歳月が流れたような気もするし、ほんの瞬（まばた）きをする間だけのような気もする。一瞬と永遠とを同時に体感しているかのような。

ああ、だからなのか。

いつしか抗う気も失せ、この場所を受け入れているのは。人の身では抗いようのない場所だとわかってしまったから。

何もかもが無く、何もかもが有る、世界。人の言葉で喩（たと）えるなら……虚無（きょむ）と混沌（こんとん）。

それでも歩き続けているのは、まだ何かを求めているからなのか。

「どこへ？　私はどこへ行こうとしている？」

答えはない。ただ一瞬とも永遠ともつかない静寂（せいじゃく）が、その声をかき消した。

「そうだね。うんと大きな学校と、たくさんの家がある街」
信じ続ければ夢は現実になる。今は何もないこの大地に、街が広がっていく光景をセラは思い浮かべた。自分が死んでしまった後の遠い遠い未来だろうけれども、いつかグラン＝パルスが楽園と呼ばれる日が来るかもしれない。与えられたまがい物ではなく、人の作り上げた本物の楽園になる日が。
「ねえ、お姉ちゃん」
同意を求めようとしてセラは振り返った。その瞬間、微(かす)かな違和感を覚えた。自分を取り巻く何かがずれたような、これまでに経験したことのない奇妙な違和感だった。しかし、それはほんのつかの間のことで、捉えどころもなく消えてしまった。
「お姉ちゃん？」
ついさっきまでそこにいたはずのライトニングの姿がない。いやな予感がした。違う。予感ではない。何かとても……いやな感覚だった。
「あれ？」
視線を戻したセラは目を見開いた。
「私……なんで？」
クリスタルの柱がさっきよりも遠い気がする。自分は柱に向かって歩いてきたはずなのに。眠りから覚めてまもないせいで、感覚が不安定なのだろうか。
「お姉ちゃん……どこ？」
声がひどく震えていることに気づく。落ち着かなければと頬を両の手で押さえたセラは、指先に触れるものに戸惑う。
涙、だった。

「めでたしめでたしだけど、終わりじゃない」
　この別れは、同時に始まりでもあるのだ。それぞれの行く道がここから始まる。大切な誰かと手を携えて歩いていく未来が。
　そうだ。私にもできることがある……。
「ねえ、スノウ。私、先生になろうと思うんだ」
「先生って学校の？」
「うん。まだ学校どころか家もないけど。でも、子供は大勢いるんだもの。学校も先生も必要になるよね」
　自分にできることは何だろうと、ずっと考えていた。失われた楽園の代わりに何を作り出せるだろうか、と。その答えがそれだった。
「子供たちに勉強を教えて、それから、大事なことを伝えたい。どうしてコクーンが壊れたのか、何が起きたのか……」
　ファルシに与えられたものをただ受け取り、何も考えずに生きてきた自分たち。偽りの楽園に疑問を抱くこともなく。それが大きな間違いだった。だから、このグラン＝パルスに生きる子供たちには、自分の頭で考えて、自分の足で立ってほしい。それができる大人になってほしい。
「あと十年か二十年経ったら、今の子供たちはみんな大人になる。一緒に街を作ってくれるようになる。私たちだけじゃ、小さい街しか作れなくても、みんなで力を合わせたら大きな街を作れるよ」
「学校の先生か。うん、セラらしいよな」
　わかった、とスノウがうなずく。
「未来の仲間なんだな。セラが作ろうとしてるのは」
　自分が教えた子供たちの中には、同じように先生になろうとする子もいるに違いない。その子がまた子供たちを教えて、その中から先生になる子が出て……。そう、未来へ向かってつながっていく仲間だ。
「よし！　決まりだ！　デカい学校を建てようぜ」
　こーんな、と言いながらスノウが大きく両腕を広げた。

「うん。ドッジ君も元気でね」
そういえば、目覚めて最初に見たのはこの子の笑顔で、最初に聞いたのは無邪気なおしゃべりだった。この小さな手を取り、セラはグラン＝パルスの大地を踏んだ。現実へと歩き出したのだ。ありがとう、とセラは微笑んだ。
おーい、と兵士がサッズを呼ぶ声がした。
「父ちゃん、大忙しだな。行くぞ」
慌ただしくサッズ親子が去っていく。行っちゃいましたね、と傍らでホープがつぶやいたときだった。入れ違いに別の兵士が走ってくる。
「おい、親父さんの居所がわかったぞ。次の便に乗ってる。資材を積んでるやつだ」
「父さんが!?」
「ああ。あと数分で到着する」
バルトロメイ・エストハイム――ホープの父が「ルシの父親」だと知っている市民は決して多くはないだろうが、皆無（かいむ）というわけでもない。それで、一般市民と顔を合わせないよう、資材運搬用の飛空艇で避難してきたのだろう。
「着陸直後なら、目立たずに親父さんと会えるだろ」
「ありがとうございます」
「礼はいい。それより急いでくれ。着陸のどさくさってやつに紛れる必要があるんでな」
兵士に急かされ、ホープもまた慌ただしく去った。別れの言葉を交わす暇もなく、ただ目と目でうなずき合うだけで。
「なんか、あっという間に離ればなれになっちまったな」
スノウの声は少しばかり寂しげだった。もともとスノウは寂しがり屋なのだ。
「うん。でも、別れていくのは寂しいけど、これで全員が家族と再会できるんだから」
「それもそうだ。めでたしめでたし、だな」
たとえ離ればなれになっても、共に旅した仲間であることに変わりはない。離れていても、つながっている。柱の中で眠るヴァニラたちと同じように。

知っていたのに、わかっていたのに、自分の目で見たときには狼狽(ろうばい)し、途方に暮れた。これが現実(リアル)なんだと、思い知らされた。

でも、現実だからこそ、自分にもできることがある。ただ見ているだけではなくて、自分の力で変えていくことができる。そう気づくと、勇気が湧いた。セラはまっすぐに頭を上げて、壊れかけたコクーンに目をやった。そして、それを支えるクリスタルを。

ヴァニラ……。今、どんな夢を見てるの？　クリスタルになっている間、私からみんなが見えたみたいに、今のヴァニラに私たちは見えてる？

クリスタルになった直後の記憶は曖昧(あいまい)だったけれども、そこから先、ビルジ湖からの出来事なら覚えている。スノウとずっと一緒だった。夢の中のように頼りない感覚しかなくても、スノウのそばにいた。

おそらく、涙のクリスタルをずっとスノウが持っていてくれたからだろう。だから、セラはクリスタルになっても、スノウの声を聞き、スノウと同じ風景を見ることができたに違いない。

クリスタルになって見る夢は人それぞれに異なるらしい。あのドッジという男の子は、たくさんのチョコボと遊ぶ夢を見ていたという。あの子に懐いていたひなチョコボが見せてくれた夢なのかもしれない。

それとも、サッズさん……だっけ、あの子のお父さんが楽しい夢を見せてやりたいって願ってたからかな？

きっとそうだ、とセラは思う。自分が一緒に旅をしていられたのは、スノウがそう強く願ったからに違いない。そして、自分自身もまたそれを望んだから。……実際のところどうなのかは、わからないけれども。

夢の中でもスノウのそばにいられたのは、セラにとっての支えだった。もしも、たった一人きりで冷たい眠りの中にいたとしたら、目覚める前に心が折れてしまったかもしれない。

だから、ヴァニラにも楽しい夢を見ていてほしい。心だけでも、みんなと一緒にいられますようにとセラは祈った。

「ちょっくらデカいの飛ばしてくるからよ、俺たちはここでな」

サッズの声でセラは物思いから覚めた。ドッジがにこにこ笑いながら、セラに手を振っている。

「おねえちゃん、またね」

母を亡くした悲しみを和らげるためにも。
ほら、やっぱり。今、あの二人のために動けるのは私だけだ。決まり、だな。
それに、セラを助け出して終わりになるとは思っていなかった。もちろん最初は、それだけしか考えていなかった。ただセラを取り戻したいとしか。
いつからだろう、その気持ちが変わっていったのは。
初めてグラン＝パルスの大地に降り立ち、コクーンを見上げたときかもしれない。生まれて初めて、自分の世界を外側から見た、あの瞬間。広いと思っていた自分の世界が手のひらに乗るほど小さく見えた。
空の広さに比べて、あまりにも小さなコクーン。しかし、その中には多くの人々が住んでいて、それと同じ数だけの幸せがある……。
あの驚きとも戸惑いともつかない気持ちは、生涯忘れないだろう。たぶん、あのとき、自分の中で何かが変わった。
セラを助け出して、みんなで生き延びる。その「みんな」が同じルシの仲間たちだけではなくなった。コクーンの人々すべて。その「みんな」で生きる未来を夢見るようになった。
それは今も変わらずに続いている。いや、コクーンの人々だけではない。ヴァニラやファングのように、もしかしたら生き残っているかもしれないグラン＝パルスの人々。この広い世界に生きるすべての人々の未来を守りたいという願いが、この胸の内にはある。
だから、私の戦いはまだ終わらないんだ……。
それに、一刻も早く旅立たなければと気が急いていた。理由はわからない。ただ、予感だけがあった。いつの間にか、ライトニングは足早に歩き出していた。
なぜだろう？　何が私を駆り立てる？　いったいこれは……何なんだ？

ほんの少し前まで、セラを守るのは自分の役目だった。小さな手を引いて歩いた日々のことをライトニングはなつかしく思い出す。その役目を譲り渡すときが来たのだ。いや、ずっと前から、スノウはその役目を引き継いでいたのかもしれない。自分が気づかなかっただけで。

最初は口先ばかりの男だと思っていたが、いつの間にかその言葉に励まされていた。前に進む力をもらった。おそらく、その言葉に嘘がないからだろう。だから、スノウの言葉は人を動かす力になる。

スノウになら任せられる。信じていられる。この広大で、過酷なグラン＝パルスの大地を生き抜いていくだけのものを持っている男だ。

幸せになれ、セラ。

そうつぶやいて、ライトニングは微笑んだ。ひとつの役目を無事に終えたという満足感がある一方で、かすかな寂しさがある。けれども、その寂しささえも今は心地よい。

サッズが騎兵隊の兵士とともに、飛空艇の発着ポイントに歩いていく。その腕に抱かれたドッジがライトニングに向かって手を振ってくる。人なつっこい子だ。手を振り返してやると、ドッジはうれしそうに笑った。

サッズにも、ドッジを育てるという役目がある。子供にとって、親の代わりなどありはしないのだ。父と母を相次いで亡くした自分だからこそ、少しでも長く父子で幸せな時間を過ごしてほしいと思う。

それでなくても、パイロットという職を持つサッズはこの先、多忙を極めるだろう。コクーンとは比べものにならないほど広大なグラン＝パルスの生活には、飛空艇が不可欠だ。サッズの技能はますます必要とされる。とてもじゃないが、ヴァニラたちを解放する方法を探す旅などできはしない。

ホープにも無理だ。戦いの日々にあっては、アレキサンダーを使役する心強い仲間だったが、ルシの力が消えた今は、ごく普通の少年だった。

しばらくは勉強どころではないかもしれないが、人々の暮らしが落ち着けば、何らかの形で学校も再開されるだろう。学校に通って、友人たちと遊んで……そんな生活が待っている。

セラを守るために早く大人になりたかった自分と違って、ホープには残り少ない子供時代を存分に楽しんでほしかった。

ヴァニラがくすくすと笑う。しょうがねえだろ、だいたいあいつらは……と、ため息をつきかけたファングは、やれやれと苦笑した。

うちらのことはほっとけ、と怒鳴るファングが目に浮かんで、ライトニングは小さく肩をすくめた。

でも、わかってるんだろう？　仲間を放っておけるはずがないことくらい。

お互い、相手の考えそうなこと、言い出しそうなことが推測できる程度の時間は共有している。それが共に戦った仲間というものだろう。

おそらく、他の仲間たちもヴァニラとファングを元に戻したいと願っているに違いないのだ。ただ、クリスタルになったルシを元に戻すのは人の手に余るし、何よりコクーンを支える柱を壊すわけにはいかない。

コクーンを支える柱は元のままにして二人を連れ出すか、支えがなくなってもコクーンに危険がない状態にして柱を外すか……。いずれにしても、現在の人間の技術では不可能な話だった。

だから、探しに行くんだ。

この広大なグラン＝パルスのどこかに、それを可能にする技術が眠っているかもしれない。或(ある)いは、そのヒントとなる記録が残されているかもしれない。

以前、烙印(しるし)を消す方法を探してこの大地をさまよったが、見つけられずにコクーンに戻った。ただ、あのときは隅々まで歩き回ったわけではない。まだ足を踏み入れていない場所もある。そこを探せば、今度は見つかるかもしれない。ルシでなくなった今、魔物の徘徊(はいかい)するグラン＝パルスを行くのは、たやすいことではないだろう。長い旅になるに違いない。

となると、少なくともスノウを行かせるわけにはいかなかった。スノウにはセラを幸せにするという大事な役目がある。ライトニングは、並んで歩く二人の後ろ姿に目をやった。

ファングは、もう一人の「許しを乞うべき人」に視線を移す。スノウの隣で微笑むセラに。

『許すかどうかはセラに決めさせる』

厳戒態勢のパルムポルムの街に潜伏しているとき、ライトニングはそう言った。

許して……くれるかな。うちらのことを。

大丈夫だよ、とヴァニラがささやく。セラは優しくて、強いから。

そっか。だったら、これでうちらの仕事は終わりだな。クソッタレな使命もコクーンがぶっ壊れて都合よく片づいたし、みんなルシから普通の人間に戻れたんだ。

いや、正確にはまだ終わっていなかった。コクーンを支え続けるという役目が残っている。もっとも、今のファングにとって、それは仕事と呼ぶほどたいそうなものではなかった。この不思議な眠りに身をゆだねて、長い長い時を過ごせばそれでいいのだ。傍らにはヴァニラがいる。いつシ骸になるかと恐れる必要もなく、二人で穏やかに過ごしていける。

仕事っつーより、ご褒美みてーなもんだよな。

そのときだった。ふと、微笑む気配を感じた。

誰だ?

ファングが振り返るのと同時に、ヴァニラもまた驚きの声を上げた。そう、自分たちはこの気配を知っている。遠い昔に……知っていた。おそらくそれは、消えてしまった記憶の中に、ある。

女神の名をヴァニラがつぶやいた。そうだった。ヴァニラには記憶があった。だから、この微笑みの主を覚えていたのだ。なんだ。そうか。そういうことか。全部、わかったよ。奇跡ってやつは、そういうことだったんだな。

結び目がきれいに解けたような気がした。消えた記憶が戻ってきたわけでもないのに、霧が晴れるようにすべてが見えた。

ファングは改めて、仲間たち一人一人に目をやった。サッズはドッジを育てるのに忙しいだろうし、ホープはまだ大人というわけではない。問題は、スノウとライトニングだ。

うちらを助け出そうとか、元に戻そうとか、言うんじゃねーぞ。絶対だからな。てめえのことだけ考えてろ。いいか?

わかったな?

「よし。それじゃ、行くか」
見上げれば、クリスタルの柱が煌(きら)めいている。大切な仲間二人が眠る場所。また会おうな、とつぶやき、サッズは足早に兵士の後に続いた。

小さな子供の笑顔を見るのは、久しぶりのような気がした。不思議だ。コクーンで目覚めた後、ボーダムのショッピングモールやエウリーデの広場で、子供なんていくらでも見かけたはずなのに。
たぶん、見ている自分自身の心の持ちようが変わったせいだろうとファングは思った。
変わった、というより戻ったと言ったほうが近いかもしれない。ヲルバの郷で、遊び、駆け回る子供たちを眺めていたときの自分に。
ガキってみんな、同じ顔して笑うのな。コクーンのガキも、ヲルバのガキも。妙なもんだ。
当たり前だよ、コクーンでもヲルバでも子供は子供だもん、とヴァニラが笑う。
そりゃそうだ、と答えながら、ファングは「ただの子供」に戻ったドッジの笑顔を飽くことなく眺めた。もうあの子は聖府(せいふ)のルシではない。しるしの消えた手の甲を見たときには、心の底からほっとした。
『ドッジのことは、おまえたちのせいじゃねえ。あのエウリーデの事件は、ドッジから目を離した俺の責任だ。それでいい』
あのとき、サッズはそう言って、ファングを責めようとはしなかった。あの言葉には救われた。肩に乗っているものが確実にひとつ分、軽くなった。
ただ、それでも自分自身の中に責める気持ちが残っていた。無関係の子供を巻き込んでしまった。たとえそれがコクーンの子供であっても、許されることではない。そう自分を責める声がした。
その声を消せるのは、サッズの言葉ではなく、ドッジ本人の言葉しかないだろう。そう思っていた。だが、実際には違った。許しを与えてくれたのは言葉ではなく、笑顔だった。

と思う。
「ドッジ」
　抱えていたドッジを下に降ろし、顔の高さが同じになるように膝をつく。
「父ちゃんの仕事はパイロットだ。おまえの仕事は何だった？」
「えっとね……たくさんご飯を食べて、たくさん遊んで、お昼寝して、ちょっとだけいたずらして、叱られて、ごめんなさいして……」
　毎朝、出かける途中でこんな会話を繰り返した。そして、保育園に着くと「ほら、おまえの仕事場に着いたぞ」と言って、ドッジを送り出してやったものだ。
「そうだ。けど、今日だけはちょいと違う」
「ちがうの？」
「今日のおまえの仕事はな、父ちゃんの仕事を見てることだ。父ちゃんの隣で、いい子にして座ってる。できるよな？」
　ドッジの顔がぱっと輝いた。これまでドッジは、サッズが操縦しているところはもちろん、操縦席そのものも見たことがなかった。好奇心で目をくるくるさせるドッジに、サッズは急いで念を押す。
「いいか？　勝手に立ち上がったり、走り回ったりするんじゃねえぞ。じっとしてるのが仕事だからな。おまえもだ」
　ドッジの肩に止まっているひなチョコボにも、話を振る。
「勝手に飛び回ったりするなよ」
　心得た、とばかりにひなチョコボが高らかに鳴いた。それを合図に、再びドッジを抱き上げる。心地よい重さだった。
　もっとも、こうして軽々と抱き上げるのも、そう長くは続かないだろう。子供はあっという間に大きくなる。あと十年も経たずに、ドッジは今のホープと同じ年齢になるのだ。その短い時間を大切にしていこうと思った。
　そして、ドッジが大人になったら、ヴァニラとファングに言ってやるのだ。
　こうやって大人になっちまえば、どうってことねえ話だろ？　ガキのころ、ルシだったかどうか、なんて話はよ……。
　何もかも昔話だと、みんなで笑い飛ばす日が必ず来る。今はまだ、それが少しばかり遠い未来だとしても。

「兵隊さん、パイロットは足りてるのかい？」
　何かできることはないかというホープの言葉を耳にした瞬間、サッズは反射的にそう問いかけていた。
「あれだけの人数を避難させるんだ。パイロットの頭数は多いほどいいよな」
　サッズはコクーンを指さした。三分の一が失われたとはいえ、コクーンの全住民を安全な場所に避難させるには、いったい飛空艇を何往復させれば足りることか。
「それはそうだが……」
「なら決まりだ。操縦席にじっとしてりゃ、顔を見られる心配もねえ」
　飛空艇の出番は、コクーンからグラン＝パルスへの移動だけではない。コクーン内部では落下の衝撃で地滑りを起こしたり、建物が倒壊したりで、避難もままならずに孤立した住民もいるに違いないのだ。彼らの救出には小型飛空艇が必要になる。当然、それを操縦するパイロットも。
「すまないな。正直なところ、あっちもこっちも手が足りないんだ」
「けど、おかげでＰＳＩＣＯＭ（サイコム）とはすんなり停戦協定だ。悪いことばかりじゃねえさ」
　柱の真下では、青い軍服に混じって、ＰＳＩＣＯＭの兵士たちが資材を運んでいた。所属に関係なく、誰もが市民の安全のために働こうとしている。サッズには、それもまたひとつの「奇跡」だと思えた。
「で、あんたのライセンスは？」
「飛ぶヤツなら何でも」
　建前では民間機の操縦しか許可されないが、この非常時に軍用機の操縦は許可できないと言い出す石頭はいないだろう。
「そうだな。子供を連れてるんで、できれば操縦席に余裕があるほうがありがたい」
　ドッジを誰かに預けるという選択肢はサッズの中にはなかった。この先、状況が落ち着けば、以前のようにドッジを預けて仕事に行くようになるだろうが、今だけは別だ。今だけは片時も離れたりしない。
　あの日、エウリーデでほんの少しのつもりでドッジから目を離したのが、すべての始まりだった。二人きりの生活にも慣れ、また、物がわかる年齢にまで成長したという安心感と気の緩みがとんでもない災いを招いた。同じ轍（てつ）は踏むまい、

「別の場所に移動したほうがいい。何しろ、あんたらは面が割れてる」
「コクーンの敵、か」
　そうだった。多くの市民は真相を知らない。彼らはコクーンを破壊したのは下界(パルス)のルシだと思い込んでいるはずだ。自分たちが今、楽園から追われるのも、ルシのせいだと。
「確かにな。目の前に、ルシがいるとなれば、市民の取る行動はひとつだ」
　パルムポルムでの光景が脳裏をかすめる。街の人々の、敵意に満ちた目。
「わかった。そちらの指示に従おう。無用な騒ぎを起こしたくはない」
　それでいいな、と振り返るライトニングに異を唱える者はいなかった。
「すまない。あんたらが身を隠すのは、一時的なものだと思ってくれ。本当の敵が何者だったのかが公表されれば、市民の誤解は解けるだろう。それまでの辛抱だ」
　そうだろうか、とホープは胸の内でつぶやいた。生き延びるためとはいえ、自分たちはPSICOM(サイコム)と戦った。そして、PSICOMの兵士たちにも家族はいたはずだ。その家族にとっては、真相がどうあれ「下界(パルス)のルシは敵」に違いない。
　彼らの敵意と憎しみから目を背けたくなかった。甘んじて受けるだけの強さが自分にあるか、そこはまだ自信が持てないが、それでも逃げることだけはすまいと思った。
　彼らには何ひとつ償えないかもしれない。ルシの力を失い、ただの人間に戻った自分にできることなど、たかが知れているのかもしれない。が、どうせ何もできないと逃げてばかりいた自分に戻りたくはなかった。家族を失うかもしれないという不安、そして、実際に失った悲しみ。そのどちらも知っている今は。
　先を歩く青い軍服の背中に向かって、ホープは叫んだ。
「あの……。何か、僕にできることってありませんか？」

と緊張感を強いることを初めて知った。同時に気づく。パルムポルムの自宅で、ボーダム封鎖からパージに至るまでの一連の報道を目にしたときの父の心境に。

「ただ、今は避難民の誘導が最優先だ。悪いが、お父さんに会えるのは少し後になるかもしれない」

「構いません。無事だってことがわかれば。ありがとうございました」

　コクーンの市民が一斉（いっせい）に避難してくるのだ。その誘導だけでも大仕事だろうし、水や食料の配給も必要になる。そんな中で、父の安否を教えてくれた。それだけで十分だった。

　ライトニングがホープの背を軽く叩いた。振り返ると、サッズもスノウも「良かったな」とうなずいている。心配してくれていたのだ。

「それで、コクーンの被害状況は？」

　兵士にそう尋ねるライトニングは、もう軍人の顔に戻っていた。

「とりあえず三分の二は無事だ。人も街も。誰かが重力装置を操作したらしくてな、それが落下の衝撃をかなり和らげてくれた」

　三分の二は無事、ということは残り三分の一は無事ではなかったわけだ。人も街も、三分の一が失われた。

「最も被害が大きかったのは、ボーダム周辺らしいんだが、パージのせいで無人状態だっただろう？　あの地区での人的被害はほとんどなかったそうだ」

　それを幸運と解釈していいのか、皮肉な巡り合わせと見なすべきなのか、ホープにはわからなかった。ただ、ボーダムはライトニングとスノウの故郷である。

『また作ればいい。私もそう思う』

　ライトニングの言葉が耳に蘇（よみがえ）った。もしかしたら、あのときすでに、ライトニングは外殻（がいかく）部分の破損状況から、ボーダムに被害が及んでいることを悟っていたのかもしれない。

「ところで……もうすぐ、ここには避難民を乗せた飛空艇が到着する」

　その前に、と兵士は声をひそめた。

サッズがドッジを抱き上げ、後に続く。
「父ちゃん、ヒジョージってなに？」
「大変なことが山ほど起きてる時って意味さ。まあ、父ちゃんはずっと非常時みてえなもんだったけどよ」
ドッジの肩に止まっていたひなチョコボが、「来ないのか？」とでも言いたげにスノウたちに向かって一声鳴いた。
ごめんな、とスノウは心の中でもう一度、ヴァニラとファングに詫びた。
もう少しだけ、待っててくれ。ここでやるべきことをすませたら、グラン＝パルスでの人々の暮らしが軌道に乗ったら、必ず助けに行く。みんなで笑っていたあのヴィジョンを、幻にはしない。
「俺たちも行こう」
「うん」
コクーンを見上げていたときとは違う、明るい表情でセラがうなずく。その肩を抱き、スノウは歩き始めた。

「すみません！　バルトロメイ・エストハイムって人を知りませんか!?」
青い軍服の兵士の一団に向かって、ホープは必死で叫んだ。せめてリグディか、その部下がいればと思ったが、どうやらここにいるのはリグディの隊ではないらしい。どの顔にもまるで見覚えがなかったし、誰もが困惑したように首を傾げている。
「パルムポルムで騎兵隊に保護されたのはわかってるんです。誰か……」
知りませんか、と言いかけたホープの肩をそっと叩く者がいた。振り返ると、やはり見覚えのない顔だったが、相手のほうは事情をよく知っているらしい。
「君のお父さんは無事だ。安否の確認も取れている」
その場に座り込んでしまいそうになるほどの安堵感（あんどかん）を覚えた。家族を失うかもしれないという不安がこれほどの重圧感

「家だって、食い物だって、自分たちで作ればいい。大丈夫。やれるさ。俺たち、ボーダムで同じことしてただろ？　畑を作って、魔物を狩って」
黙って聞いていたライトニングが、ふっと目許を和ませて笑った。
「スノウらしいな。壊れたら作る、か」
そう言って、ライトニングがコクーンを仰ぎ見る。
「そうだな。また作ればいい。私もそう思う」
「だろ？　今日からここが俺たちの故郷だ！」
まだ何もないだろうが、とライトニングが雑ぜ返す。セラがくすりと笑う。
「ああ、そうか……。グラン＝パルスではみんなが家族」
覚えているか、とライトニングがスノウを見る。もちろん、覚えている。ヴァニラの言葉だ。
「なら、もうここは私たちの故郷なんだ。今日からじゃなくて、ずっと前から」
ライトニングが柱に向かって微笑んだ。ヴァニラとファングに。
「あいつらの故郷だもんな」
グラン＝パルスをさまよい、わずかな希望を頼りにヲルバ郷を目指した日々。確かに自分たちは共に戦う仲間であり、家族だった。あのときから、この大地は地獄でも敵地でも未開の地でもなく、もうひとつの故郷になったのだ。
そのときだった。背後で息を呑む気配がした。ホープだ。その視線の先に、青い軍服姿の一団がいる。
「あの人たち、騎兵隊の……」
つぶやくが早いか、ホープが駆け出していく。そうだった。ホープの父親の安否がまだだったのだ。ただ、パルムポルムで彼を保護したのは騎兵隊の別働隊だったと聞いている。彼らなら、何か情報を持っているかもしれない。
「私たちも行こう」
ライトニングがホープを追うようにして歩き出す。
「だな。非常時には助け合わねえと」

感が欲しかった。それ以外のことは考えられなかった。
俺の頭は単純にできてるからな。それで手一杯だったんだ。
ごめんな、とスノウは柱の中で眠りに就いているであろうヴァニラとファングに詫びた。セラの視線の行き先に気づいて、「現実」に引き戻された。まだ仲間が二人、助かっていない。浮かれている場合ではなかった。
冷たい眠りの中で見たヴィジョンは、みんなが幸せそうに笑っている未来だった。あの中には確かにヴァニラもファングもいたのだ。ならば、まだ終わっていない。これで終わりじゃない。
「コクーン、壊れちゃったんだよね」
セラの声でスノウは我に返った。
「私は助けてもらえたけど……。ちゃんと人間に戻れて、スノウにもお姉ちゃんにもまた会えたけど」
セラはそう言って、コクーンを見上げた。
「何かしなきゃいけないのはわかってる。私だけ助けてもらえて、私ばっかり幸せになるなんて、できないもの。でも……何をすればいいんだろ」
確かにセラの言うとおりだった。誰もが住む家を失い、生活の基盤を破壊された。助けを必要としている人々の数はあまりにも多い。どこからどう手を着けていいのか、考えただけで気が遠くなりそうだ。
だから、考えるのをやめようと思った。どうせ、自分の頭は細かいことを考えるのには向いていない。
「壊れたんなら、また作ればいいじゃねえか」
単純明快な答えだ。
「コクーンを？」
セラが目を丸くする。
「いや、そうじゃなくて。コクーンの代わりを、ここに作る。グラン＝パルスに新しい街を作るんだ。俺たちで」
その場で浮かんだ思いつきに過ぎなかったが、口に出してみると悪くない。いや、これ以上にうまいやり方はないんじゃないかとさえ思えてくる。

めだよ。
大切な人との再会を果たした仲間たちを、ヴァニラは満ち足りた気持ちで眺めた。やっと、償えた。自分たちのせいでルシにされてしまったドッジとセラに。
ややしばらくして、再会の驚きと喜びが落ち着いたころ、安堵感が胸に広がった。

ややしばらくして、再会の驚きと喜びが落ち着いたころ、セラと目が合った。いや、セラはヴァニラではなく、コクーンを見ていた。その瞳に暗い影が落ちる。
あれは私の目だ、とヴァニラは思った。自分たちの行いが誰かを不幸にした。無関係な人々を巻き込み、彼らの運命を変えてしまった。その罪の重さが怖くて、苦しくて、向き合うことすらできなくて、ただただ逃げて。
私も同じ顔、してたんだ……。
だから、セラの胸の内は痛いほどわかる。セラが今、どんな気持ちでコクーンを見上げているのか。
でも、とヴァニラは思う。あの日、セラはボーダムの海辺でヴァニラを励ましてくれた。『みんながいるから、私は乗り越えられる』と言ったセラの瞳を今も覚えている。たとえ今、罪の意識や後悔の念に押しつぶされそうになっていても、すぐにセラは立ち上がって前を向くだろう。
ヴァニラは、セラの傍らに立つスノウに呼びかける。
セラの隣にいてあげてね。そうすれば、セラは何があっても乗り越えられる。たとえ迷っても、歩いていける。スノウのことだから、「俺たちは奇跡を起こせる！　ヴァニラとファングを助ける方法を探しに行くんだ！」とか言い出しそうだけど。だめだよ。ちゃんとセラのそばにいないと。
聞こえるはずもないのに、スノウが振り向いた。まるでヴァニラの声が届いたかのように、「ごめんな」とつぶやくのが見えた。

再会できた瞬間には、過去のことも未来のことも何も頭になかった。ただ確かめたかった。セラを取り戻したという実

「まるで、奇跡だ」
コクーンを振り仰ぐライトニングの双眸は驚きに満ちていた。そうだね、とヴァニラは声にならない声で答える。
落下するコクーンを止めなければと必死だった。あの中には大勢の人がいて、いくつもの人生がある。それを守りたいと心の底から思った。
ずっと昔、ファルシ＝アニマの神殿でクリスタルになっていたときとは違う。あのときはファルシ＝アニマも神殿内の何もかもが眠りについていたせいだろう。夢すら見ないほど深い眠りだった。
今は、眠っているのに世界が見える。こんなにも美しくて、こんなにも暖かなグラン＝パルスが、愛おしくてたまらない人々が、見える。仲間たちの声が聞こえる。
飛空艇から幾人もの兵士が武装して駆け出していく。あの服には見覚えがある。そう、確かＰＳＩＣＯＭとか言ったっけ。でも、彼らはもう敵じゃない。今は市民を安全な場所に誘導するために、必死で走り回っている。
この先、彼らが市民に銃を向けることはないだろう。確証があるわけではないが、信じられる。市民の安全を確保しろ、と叫ぶ彼らの声に嘘はない。
「もう会えないのが運命でも……僕たちは奇跡を起こせる」
ホープの声が聞こえた。うつむき加減の横顔は寂しげではあったけれども、強い決意が感じられた。コクーンの人々を救うという奇跡を起こしたのだから、クリスタルになったヴァニラとファングを再び解放するという奇跡だって起こせる、そう考えているのだろう。
ありがとねホープ、とヴァニラはささやいた。でも、もう会えないってわけじゃないんだよ、とも。
ずっと見てるから。たとえ、みんなからは見えなかったとしても、私たちは見てるから。コクーンを支えるクリスタルの柱から、このグラン＝パルスの広大な大地を一望にして。だから、みんな、幸せになって。大切な人の手を離しちゃだ

-Episode i-

FINAL FANTASY XIII

Eishima Jun

※ゲーム本篇をプレイ後にお読み下さい。より「FINAL FANTASY XIII」の世界観が深まります。

-Episode i-

FINAL FANTASY. XIII

Eishima Jun

SQUARE ENIX.